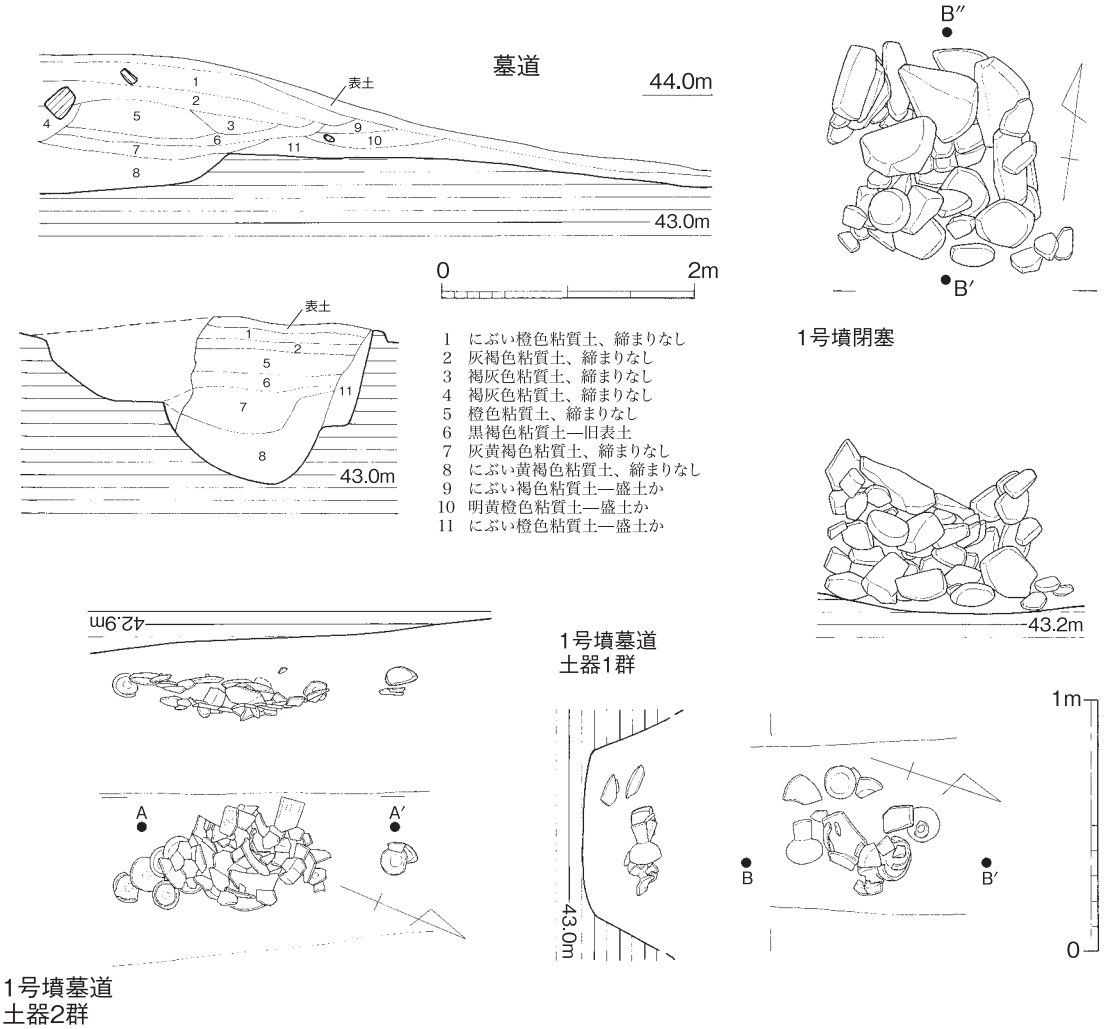
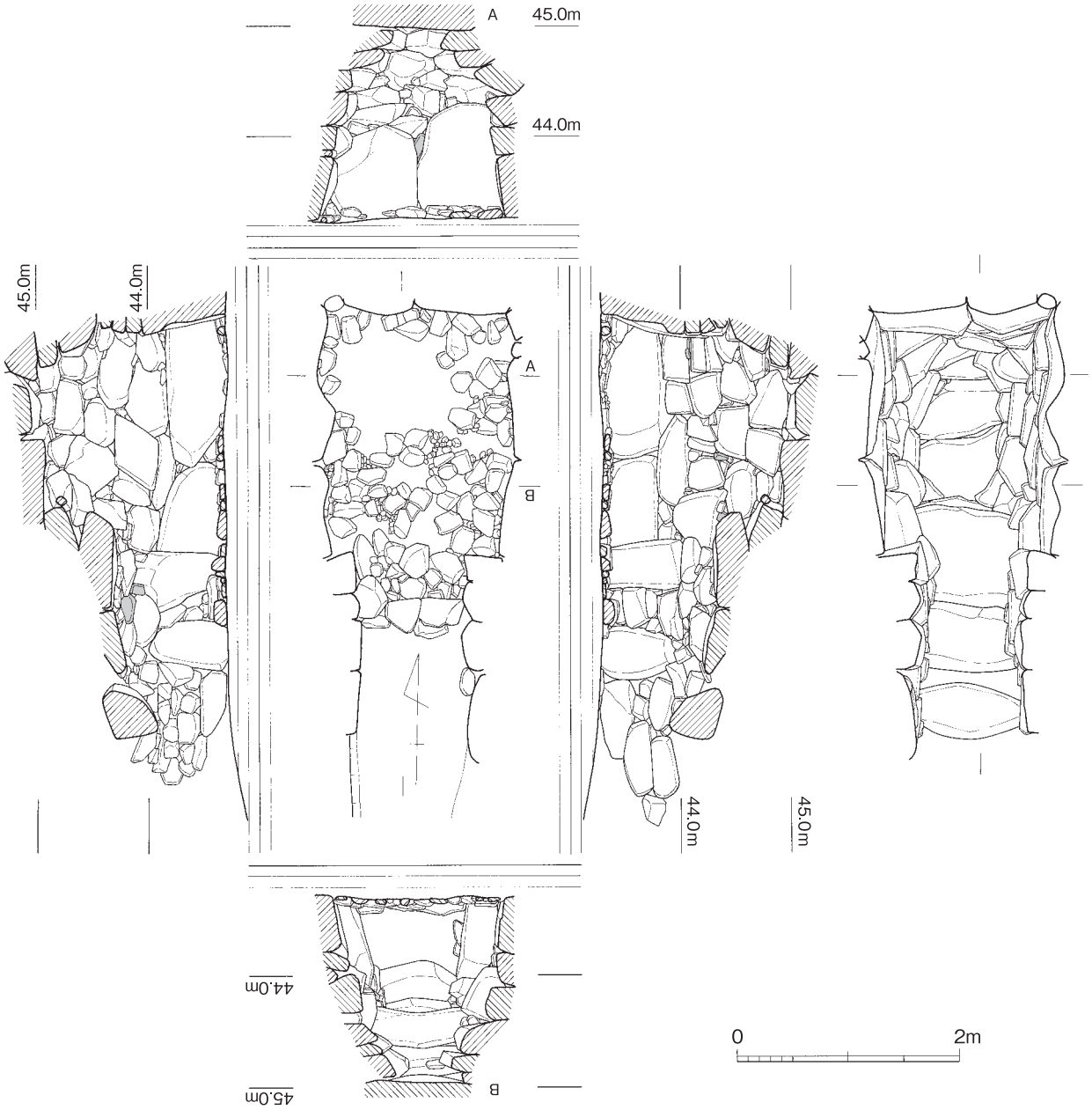
東側は墓道より2.5m、西側は6mの位置で消え、南側には溝が見られない。東側の周溝の一部は2号墳と共有し、調査前段階でわずかに窪みが見られた。旧表土と見られる19層上に、地山由来の17層を盛った後に主体部の設置を行っていることから、古墳築造の最初の段階で周溝の掘削を行った可能性がある。主体部の掘形は土質の異なる土を版築状に積み上げており、特に東側で顕著に認められる。主体部の石の隙間には白色粘土を埋め込んでおり、雨水等の浸入を妨げる工夫が見られる。北側・西側でわずかに盛土端部が上がっており、一部カルデラ状に積んだことがわかる。外護列石等の施設は認められなかった。主体部掘形は5×3.5m、深さ1mである。断面に一部遺構らしき掘り込みが見られたが、旧表土面から遺構は確認できなかった。

ii）主体部（図版77～79、第114・115図）

石室の規模は2.2×1.6m、高さ1.7mを測る単室の横穴式石室である。玄門付近では幅1.4mとわずかに細くなる。奥壁は幅0.7m、高さ0.8～1mの石を2枚並べ、側壁は左右共に奥壁側から幅1.1m、高さ0.6m、幅0.8m、高さ0.6mの石を基底として据える。共に上側は0.1～0.6mの比較的小さな石を持ち送り状に積み、天井部では1.1×0.6mの規模になる。玄門部は厚さ0.3mの石を二つ重ねることで段差を付け、袖石には幅0.4m、高さ0.7mの石を用い、縦に据える。天井石は幅0.4～1mの石を6枚並べる。石材はほとんど花崗岩を用いており、間に詰める小礫にわずかに凝灰岩系の石材が用いられる。



第114図　皿山古墳群Ⅲ- 1号墳墓道・閉塞実測図（1/60、1/30）



第115図　皿山古墳群Ⅲ- 1号墳主体部実測図（1/60）

閉塞は径20cmほどの円礫を、袖石から1.4mの位置から1mほどの範囲で乱雑に積む。高さ0.4～0.5mが残存しており、隙間は20cmほど開いていた。中央部が低くなっており、盗掘の際に一部破壊されたものと考えられる。

羨道部は敷石がほとんど残存しておらず、長さ1.2m、幅1m、高さ0.6～1mを測る。南端の天井石は下方に落ちており、原位置をとどめておらず、本来は長さ1m、高さ1mであったものと考えられる。框石は0.3～0.4m前後の円礫を3つ置いており、周囲の敷石よりも0.05mほど高いことから認識に至った。墓道は墳丘盛土の流出土が一部に残存し、開口部付近は締りのない埋土であった。これも盗掘の際の痕跡と考えられる。開口部から2mの位置で東側に屈曲しており、総延長で7.5mほどである。幅は、開口部付近は1.4m、南端で1.1mを測り、最深部は1.2mを測る。2箇所で須恵器が集中して出土したが、いずれも床面より0.15mほど浮いており、追葬時に伴うものと考えられる。

iii）出土遺物（図版86・87・89、第116～118図）

①金属製品

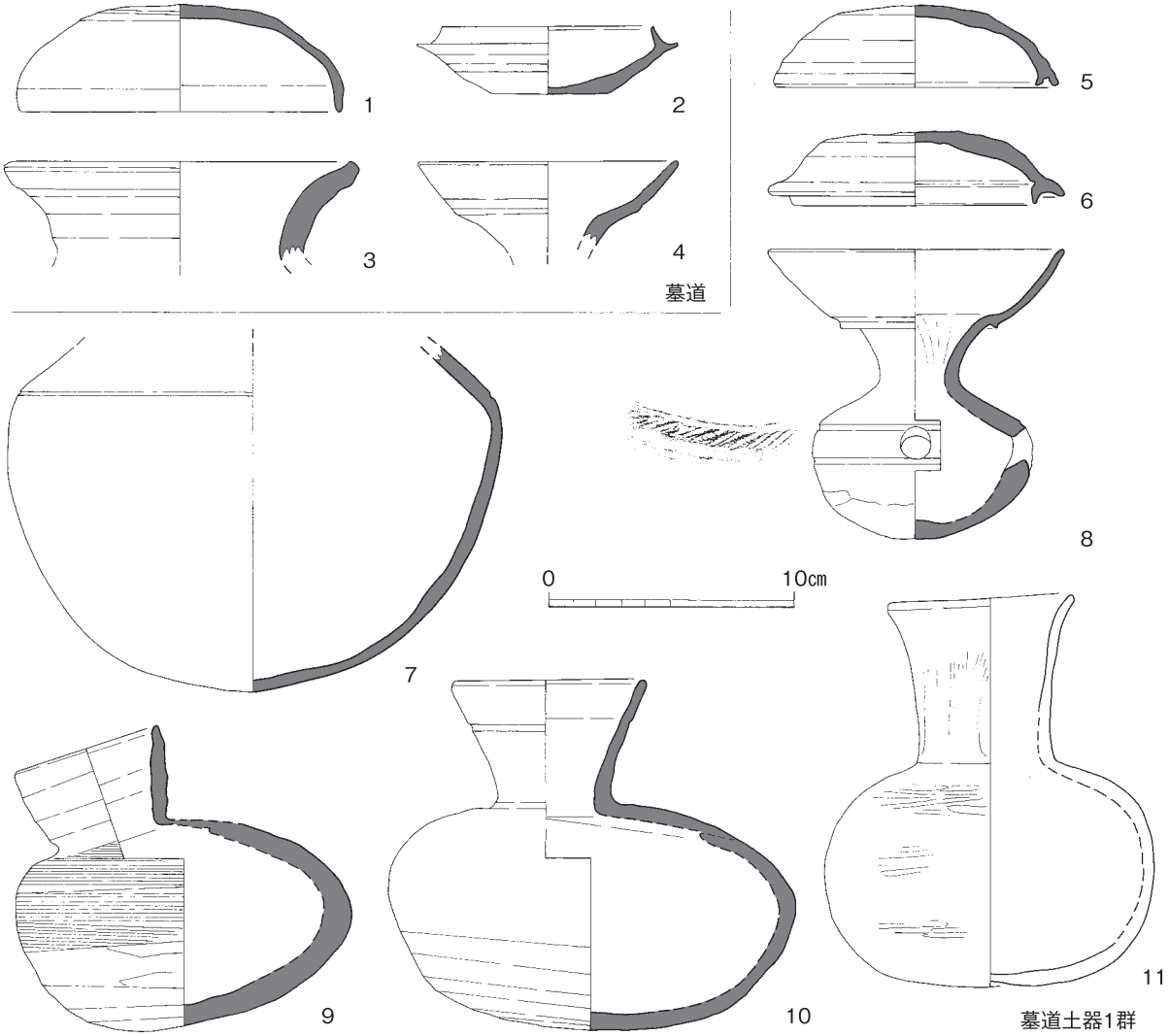
第118図1は耳環である。青銅製で2号墳出土例に比べやや大きい。石室内出土で副葬品と考えられる。2は刀子である。関部分が遺存しており、両側に関が付く。

②土器等

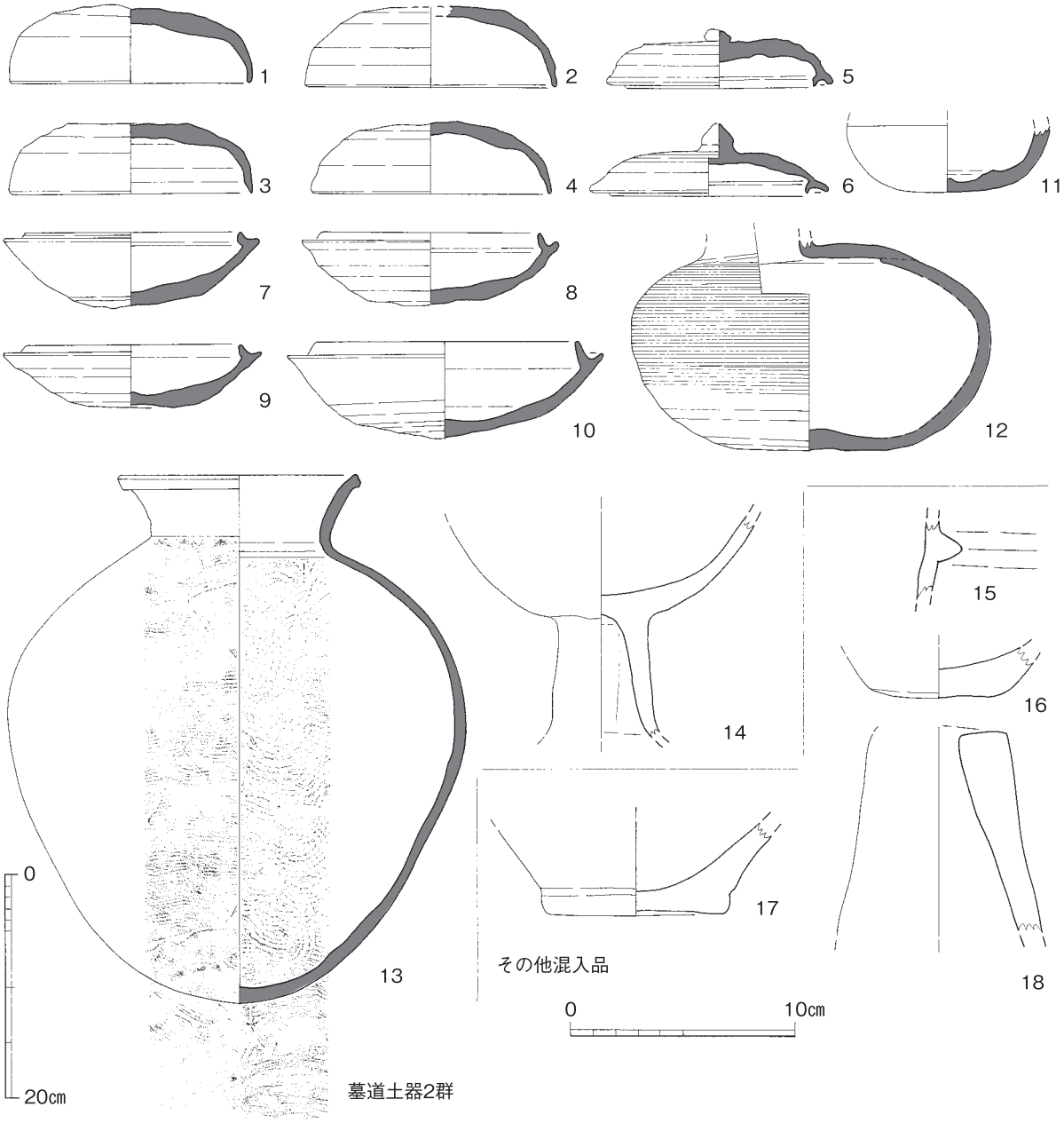
第116図1～4は墓道出土土器である。1は須恵器の蓋である。天井部が回転篦削りにより平坦になる。2は杯身である。胴部下半から底部にかけて、回転篦削りを施し、底部が平坦になる。3は甕か。内面に灰被りが見られる。4は瑳である。回転撫でを施す。

5～11は墓道土器1群出土土器である。5・6は蓋である。共に返りを持ち、6の天井部中央は未調整のまま残る。7は壷である。肩部に1条の沈線を施す。焼成不良のため、摩滅し調整は不明である。8は瑳である。胴部の凹線間に櫛描刺突文を施す。頸部内面にシボリ痕が見られる。9・10は平瓶である。9は口縁部横の製作時に充填した部分が剥離する。胴部上半カキ目、下半削り、他は回転撫でを施す。10は上半部に灰被りが見られ調整が不明瞭だが、胴部外面下半に回転篦削りを施す。11は土師器の壷である。口縁は直立気味に伸び、平底気味を呈する。摩滅するが、胴部外面磨き、頸部外面刷毛が残る。外面底部付近に黒斑が見られる。

第117図1～14は墓道土器2群出土土器である。1～6は須恵器の蓋である。5・6は宝珠形のつ

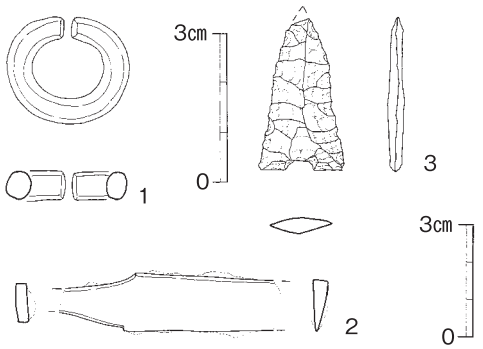


第116図　皿山古墳群Ⅲ- 1号墳出土遺物実測図1（1/3）



第117図　皿山古墳群Ⅲ- 1号墳出土遺物実測図2（1/3、13 は1/6）

まみおよび返りを持ち、やや径が小さい。1〜4はいずれも天井部外面静止撫で、外面上半回転篦削り、天井部内面不定方向の撫で、他は回転撫でを施す。5・6は外面上半回転篦削り、天井部内面不定方向の撫で、他は回転撫でを施す。7〜10は杯身である。7・8は底部外面未調整、外面下半回転篦削り、底部内面不定方向の撫で、他は回転撫でを施す。9は灰被りのため調整不明で、返り部に重ね焼きの際の別個体の破片が付着する。10は焼成不良で、摩滅のため調整不明である。11は甕である。底部のみが遺存し、外面削り後撫で、内面回転撫でを施す。12は平瓶である。胴部のみが遺存し、胴部上半カキ目、下半回転篦削りを施す。13は大甕である。胴部外面叩き、内面当て具痕、他は回転撫でを施す。14は土師器の高杯である。摩滅が著しいが、脚部内面に削りが残る。



第118図　皿山古墳群Ⅲ- 1号墳出土特殊遺物実測図（1・2は1/2、3は2/3）

15〜18は弥生時代の土器である。いずれも摩滅のため調整は不明である。15は壷か。断面三角形の突帯が付される。盛土中出土。16・17は甕か。16は平底気味、17は平底である。16は盛土表面、17は周溝出土。18は支脚である。墓道土器1群出土。古墳築造の際に混入したものと考えられる。

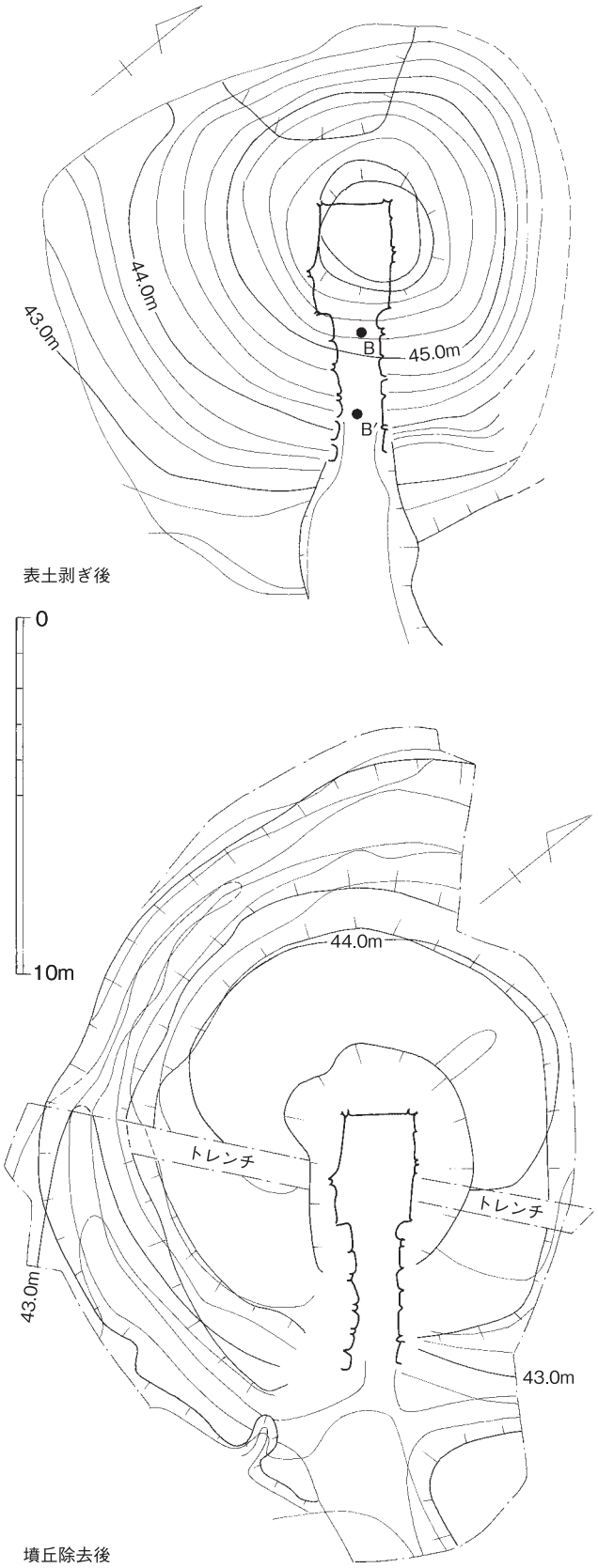
その他（図版89、第118図3）

第118図3は打製石鏃である。凹基式で抉りは0.25cmを測る。剥離が粗く弥生時代の所産であろう。盛土出土で古墳築造の際の混入品と考えられる。安山岩製である。

2）Ⅲ−2号墳

ⅰ）墳　丘（図版80〜82、第119、120図）

調査区の東側に位置し、周溝の2/5、墳丘の1/4は調査区外に続く。先に述べたように工事により破壊されるため、関係者の調査承諾を得て、墳丘のみ調査区外の掘削を行った。規模は裾部分で直径13m、周溝を含め20.8m（北側の周溝は未掘のため推定）、前面高さ3.3m、背面高さ2.1mである。周溝は幅3.2〜4.2m、深さ0.4〜0.5mほどで、墳丘の周囲を巡り墓道に接続する。南西側の周溝の一部は1号墳と共有し、調査区外の北東側を含め、調査前段階で窪みが見られた。旧表土と見られる26層から主体部掘形が掘削される。主体部の掘形は1号墳と同じく、土質の異なる土を版築状に積み上げており、特に北東・北西側で顕著に認められる。主体部の石の隙間には白色および橙色粘土を埋め込んでおり、雨水等の浸入を妨げる工夫が見られる。14・50層のように一部で盛土端部に土饅頭を積んでいた痕跡が認められ、Ⅰ区で確認された土塊状積土の痕跡である可能性がある。本古墳においても平面検出を試みたものの、背部は大きく崩れているものと見られること、大きな根株が広がっていたことなどから、



第119図　皿山古墳群Ⅲ-２号墳地形測量図（1/200）

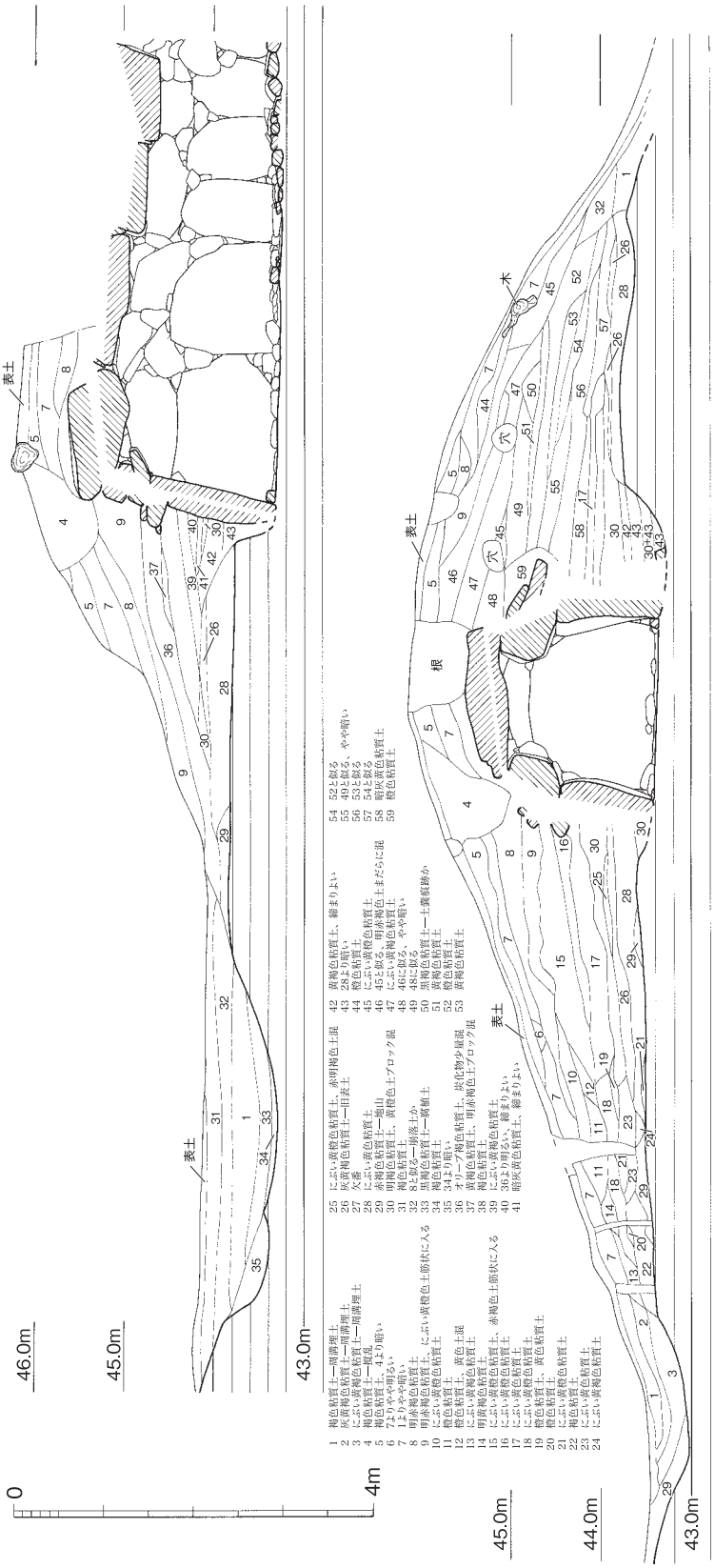
明確には認められなかった。その他、外護列石等の施設は認められなかった。主体掘形は6.4×4.6m、深さ0.8mである。旧表土面の下位の遺構は確認できなかった。南から東側にかけての周溝埋土から須恵器片が多量に出土し、墳丘前面右側から須恵器の甕底部付近が出土した。築造当初は墳丘前面を中心として並べられていたものである可能性が高い。

ii）主体部

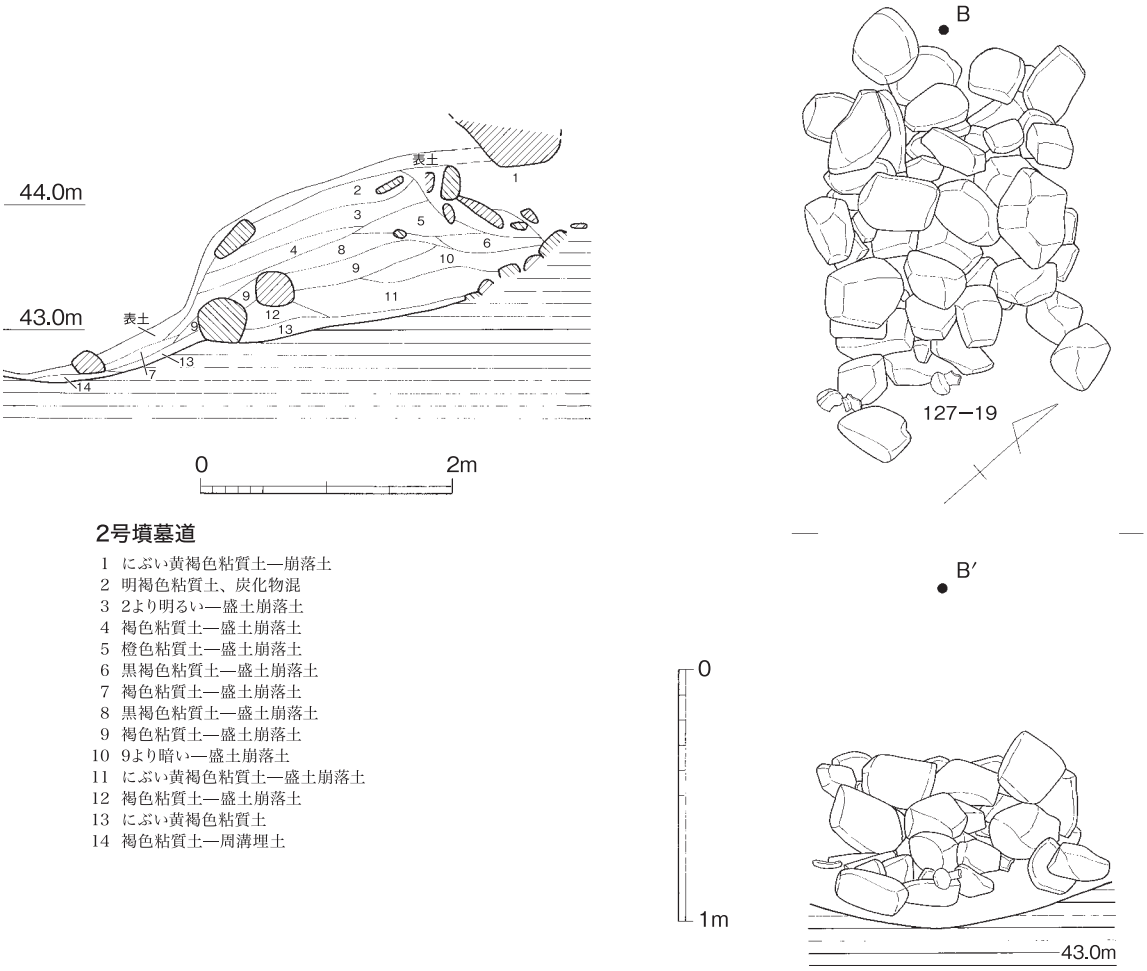
（図版82～85、第121～123図）

石室の規模は3×2m、高さ1.6mを測る単室の横穴式石室である。ごくわずかに中央が膨らむ樽形を呈する。奥壁は幅1.9m、高さ1.4mの一枚石をわずかに前傾させて配置し、側壁は左右共に幅1.1～2m、高さ1～1.2mの巨石を2枚並べて基底石とする。その上側にも0.6～1m内外の石をわずかに持ち送り状に積み、隙間を0.2m内外の小礫で埋める。天井部では2.4×1mほどの規模になる。玄門部は厚さ0.4mの石をずらして積むことで0.2mほどの段差を作り出しており、袖石には幅0.6～0.7m、高さ1mの石を用いて、縦に据える。天井石は幅0.8～1.5mの石を5枚、わずかに段差をつけながら並べ、石室から羨道までの高さが徐々に低くなるように造られている。石材はいずれも花崗岩を使用する。敷石はほとんどが現位置を留めておらず、左袖の裏側から玉類・馬具など僅かな遺物が出土した。

閉塞には径0.2～0.3mほどの円礫を、袖石から0.5mの位置から1.4mの範囲で乱雑に積む。高さ0.6mが遺存しており、天井との隙間は0.4mほど開いて



第120図　皿山古墳群Ⅲ-２号墳墳丘土層実測図（1/80）



2号墳墓道

1 にぶい黄褐色粘質土―崩落土
2 明褐色粘質土、炭化物混
3 2より明るい―盛土崩落土
4 褐色粘質土―盛土崩落土
5 橙色粘質土―盛土崩落土
6 黒褐色粘質土―盛土崩落土
7 褐色粘質土―盛土崩落土
8 黒褐色粘質土―盛土崩落土
9 褐色粘質土―盛土崩落土
10 9より暗い―盛土崩落土
11 にぶい黄褐色粘質土―盛土崩落土
12 褐色粘質土―盛土崩落土
13 にぶい黄褐色粘質土
14 褐色粘質土―周溝埋土

第121図　皿山古墳群Ⅲ-２号墳墓道・閉塞実測図（1/60、1/30）

いた。閉塞前面より須恵器の甕が出土したが、現位置をとどめているかどうかは不明である。

羨道は敷石がおよそ半分しか残存しておらず、長さ4.2m、幅1～1.1m、高さ1.1～1.4mで玄門部に向かって徐々に高くなる。敷石下から長さ1.6m、幅0.15m、深さ0.1mの溝が検出された。また、羨道の開口部から2mの位置から墓道にかけて、墓道の幅と同じ掘り込みが見られた。上面は硬化が見られたことから、ある時期の床面が掘り込みの上面にあったことは間違いなく、古い時期の床面、床下掘り込みの両方の可能性が考えられる。框石は小礫が多く認識できなかった。

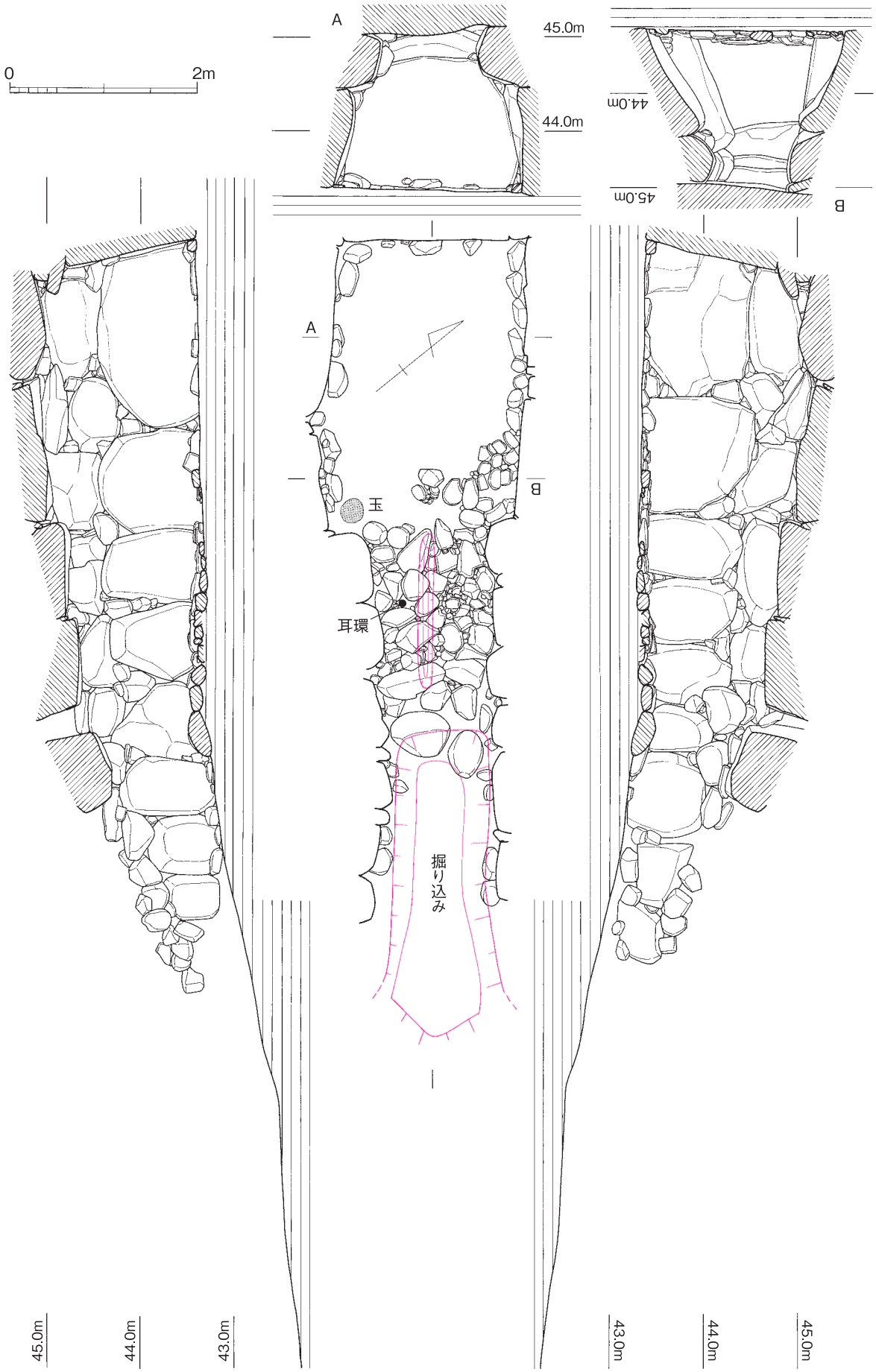
墓道は墳丘盛土の崩落土および主体部・閉塞の石が主として堆積しており、開口部付近に入り口に向かう撹乱層が認められた。盗掘の際の痕跡と考えられる。規模は長さ5.5m、幅1.1～2.7m、深さ0.4mを測る。開口部から屈曲し、丘陵の落ちまで直線的に延びる。周溝と同じく前面から土器が出土しているが、墳丘上から落ちたものと、墓道に伴うもの双方が含まれるものと考えられる。

ⅲ）出土遺物（図版87～89、第124～128図）

第128図1～28・31・33～40・43・44は石室内、45は墓道、29・30・32・41・42・46・49は盛土上、出土遺物である

①玉類

第128図1～19はガラス玉、20は碧玉製小玉である。概ね径1cm内外で、17～19のみが1.2cm以上とやや大きい。厚さと孔径に関してはそれぞれ0.65～1.1cm、0.2～0.4cmとばらつきがある。



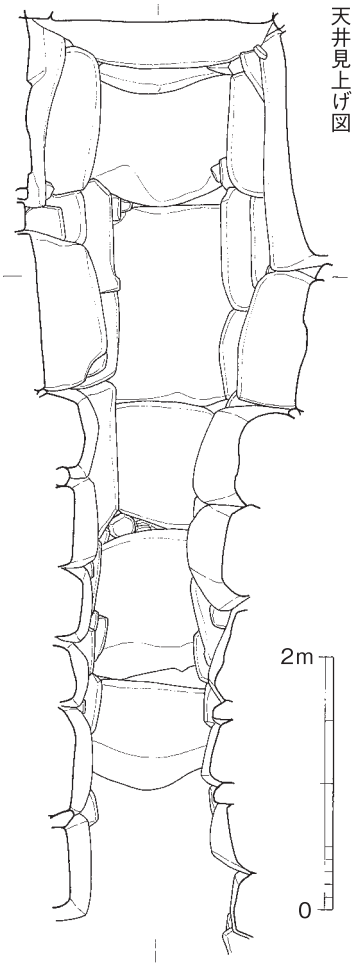
第122図　皿山古墳群Ⅲ- 2号墳主体部実測図1（1/60）

ガラス玉はほとんどが摩滅のために白色化しており、本来はより大きかったものと考えられる。

②金属製品

第128図21は銅釧か。破片のみが出土しており、復元径は5cm程である。22〜28は耳環である。22〜25・27は金メッキを施した金銅製で、金を貼った際の撚れが接面に見られる。26は全体が銀色ないしは黒色を呈し、銀メッキを施したものと考えられる。大きさは金メッキのものとほぼ同一である。27は径、厚さ共に他例よりも小さく、金メッキを施していたものと考えられる。28は中空をなす。接面がやや凹んでおり、蓋をした際の痕跡と考えられる。

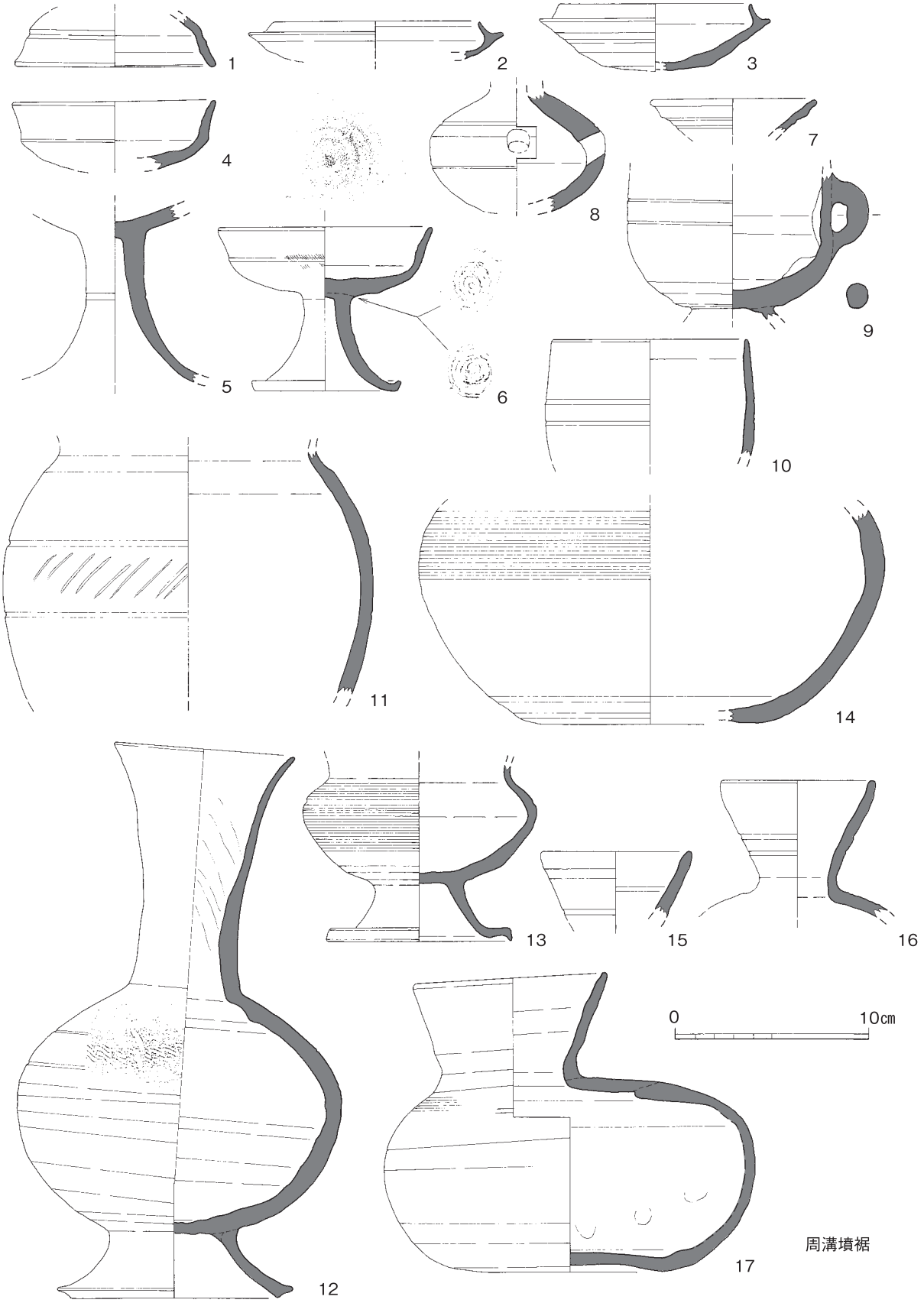
29・30は刀子か。小片のため不明確だが29には刃部が作り出され、30は端部である。31は不明金具である。上半部には孔を穿ち、下半部は中空の球形になるものと考えられる。飾り金具などになるか。32は雲珠等の金具か。端部が半円形を呈し、3箇所に鋲が打たれる。鋲はいずれも潰れており、表面から叩いたためであろう。裏面には繊維質が遺存しており、有機質に留められていたものと考えられる。33は留金具である。径2.4cmの円盤に長さ2.25cmの芯を通し、その上部に径1.4cmの蓋を被せる。円盤および蓋は金銅製と考えられる。錆のためか、一部膨れて破損しているものの完形品と考えられる。CTスキャンによる撮影で詳細な形態を確認した（図版89）。34〜38は金具か。34は径0.7cmの鋲が認められ、辻金具ないしは雲珠の一部と考えられる。35は一部のみしか遺存しておらず、雲珠、皮留金具などの可能性がある。36は側面がわずかに突出しており、内面に木質が付着する。木芯鉄張の輪鐙に伴うものか。37・38は薄い鉄片を曲げたもので、内面に木質が見られる。39は鉄鏃の基部端か。断面円形を呈する。40・41は鉄鏃の茎部か。断面方形を呈する。42は鉄鏃である。長頸鏃の刃部と考えられる。43〜46は鉸具である。43は最も残りがよく、下段の両側面に鋲が残る。44〜46はいずれも一部分のみが遺存している。46は突出部が円形を呈し、横芯を嵌める際の引っ掛けとしていたものか。46のみが薄く、断面四角形を呈する。



第123図　皿山古墳群Ⅲ-2号墳主体部実測図2(1/60)

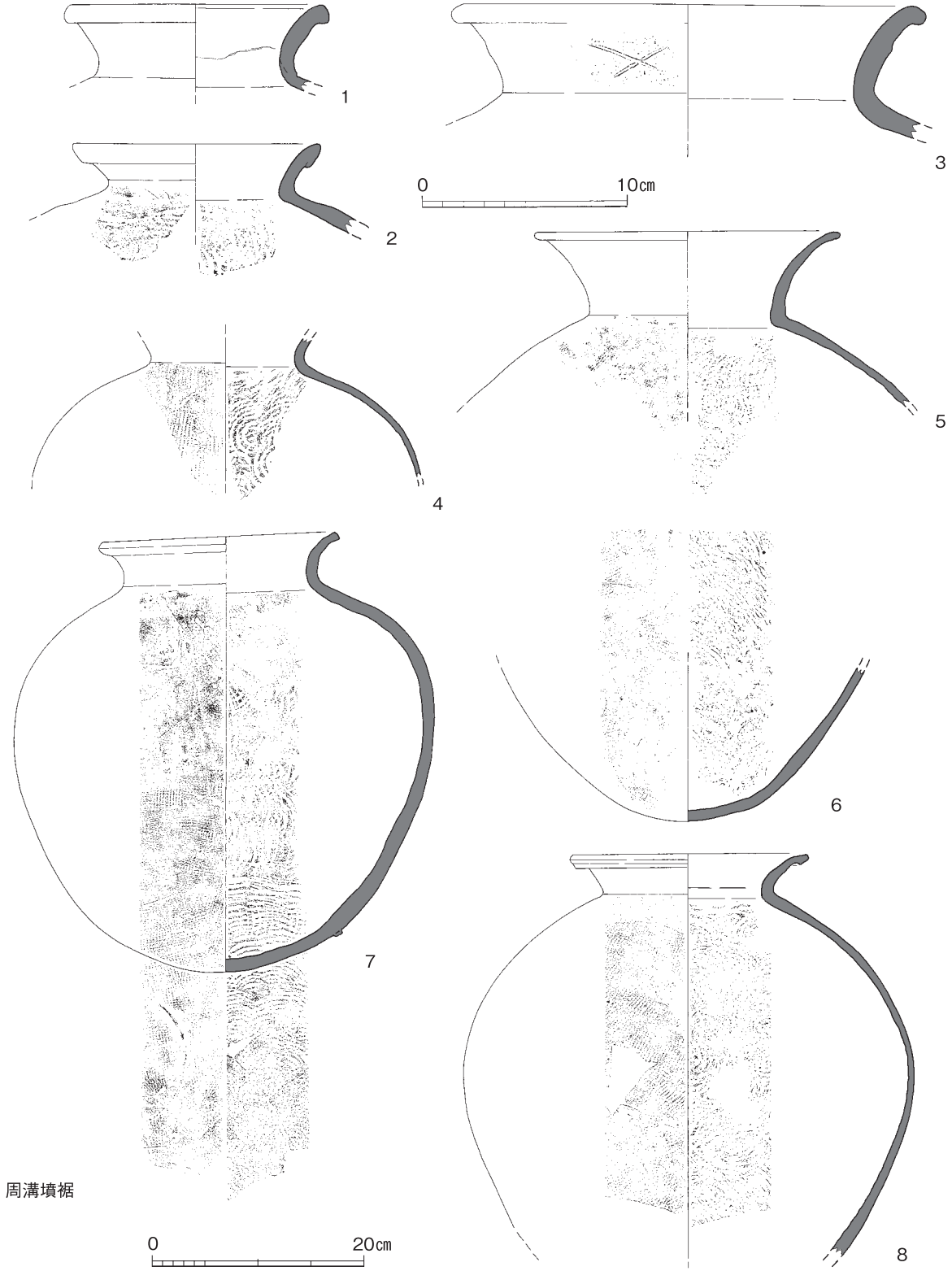
③土器等

第124・125図は周溝・墳裾出土である。1は須恵器の蓋である。やや径が小さく壷蓋か。2・3は杯身である。2は器高が低く、3は底部が回転篦削りにより平底を呈する。4〜6は高杯である。4は杯部、5は脚部のみが遺存し、5は中位に凹線が施される。6は杯屈曲部に刷毛状の痕跡が残り、刷毛後回転撫でが施されたものか。脚部内面削り、杯部内面に篦記号が見られる。杯部と脚部の接合面両方に同心円状の凹凸が施されており、接合をよくするためのものと考えられる。7・8は瑕である。同一個体である可能性もある。8の下半撫で、他は回転撫でを施す。9は脚および耳付きの椀である。外面下半回転篦削り、他は回転撫でを施す。外面中位に2条の沈線を付す。椀部の半分ほどが欠損しているものの耳は片方のみについていたものと考えられる。焼きぶくれが随所に見られ、内面底部付近、外面上位に灰被りが見られる。10は杯である。回転撫でを施し、体部に凹

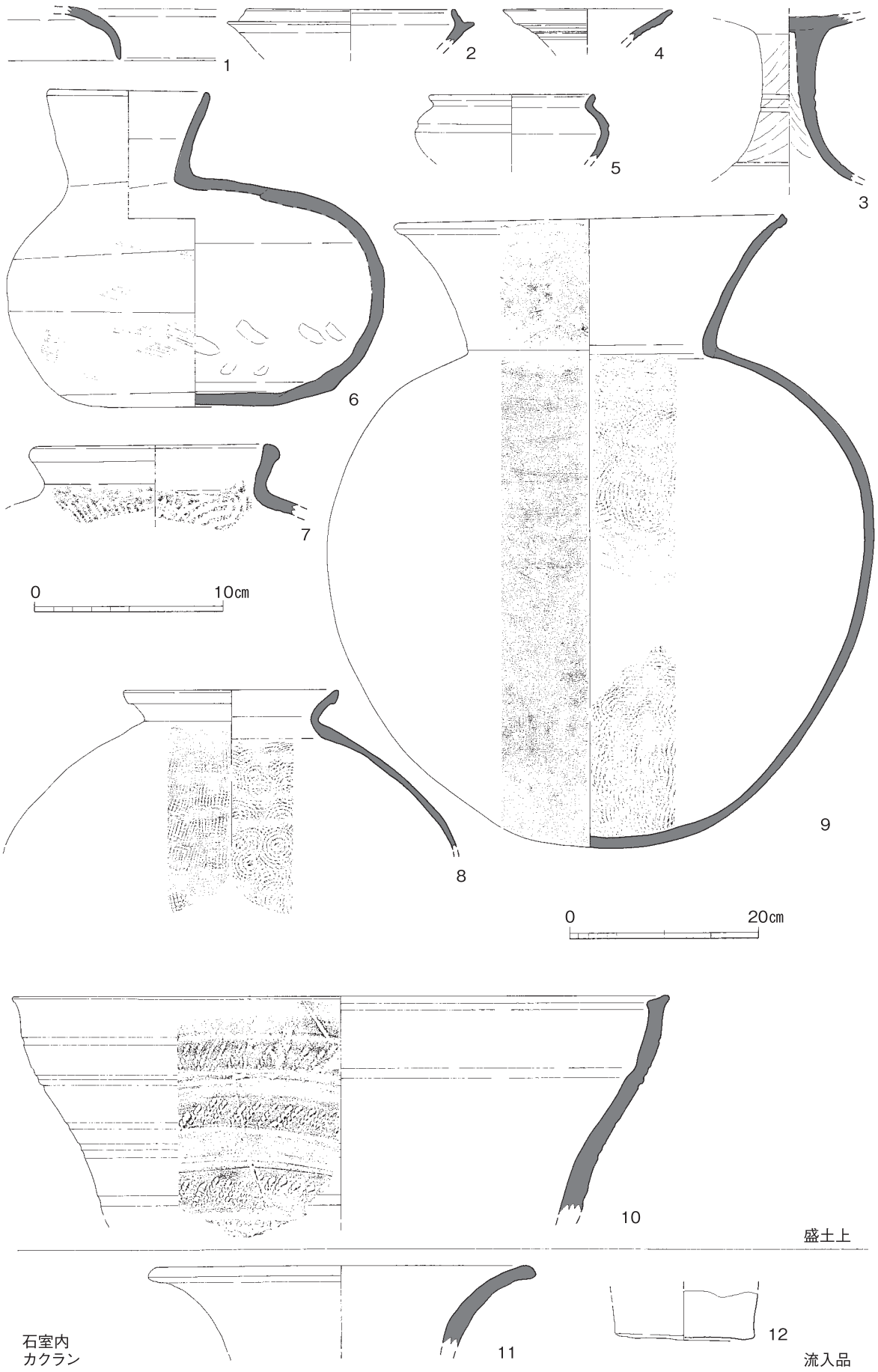


第124図　皿山古墳群Ⅲ- 2号墳出土遺物実測図1（1/3）

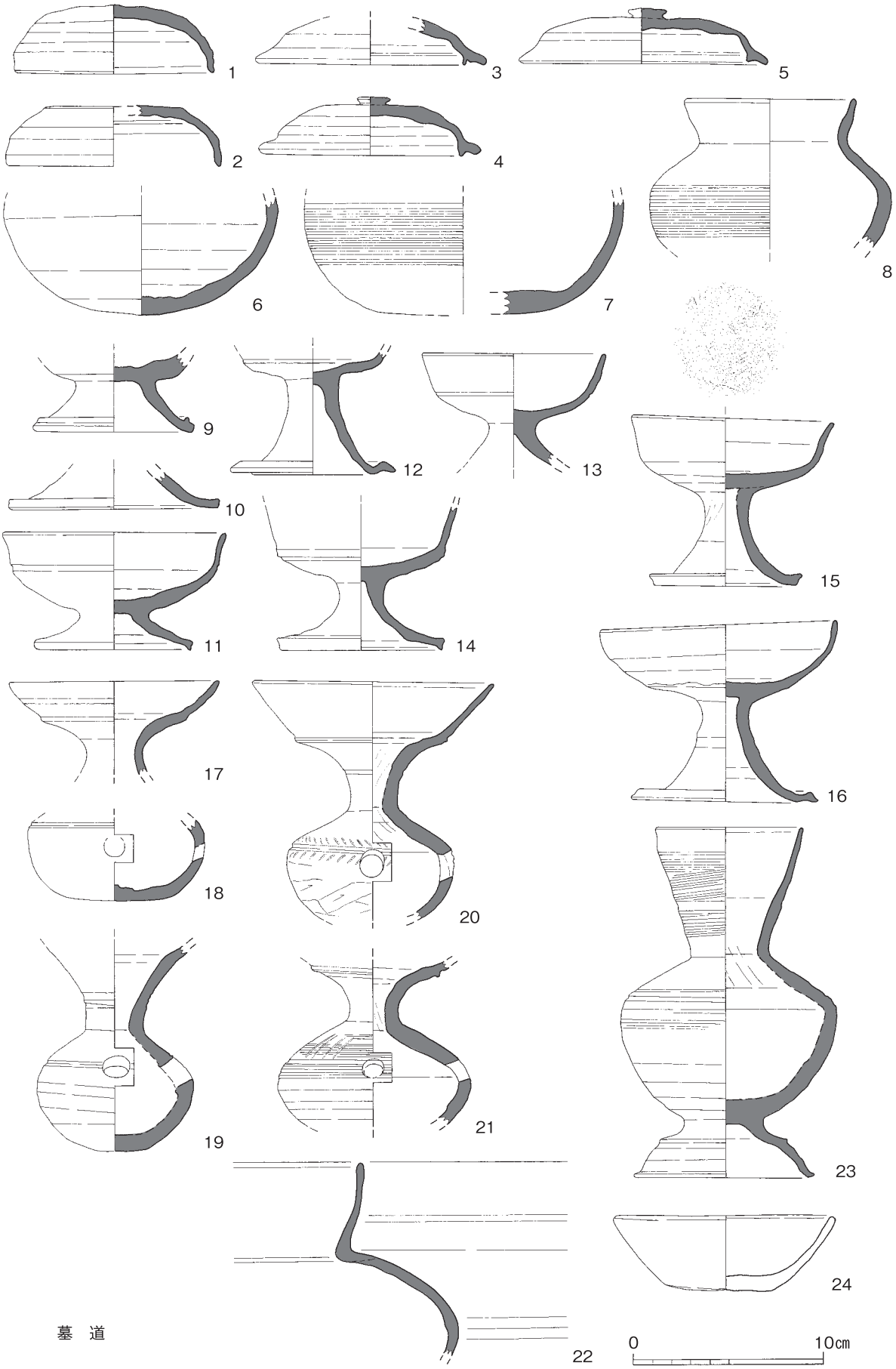
線が2条施される。11は壷である。体部に2条の凹線が施され、その間に櫛描斜行文が付される。体部内面下半のみ撫で、他は回転撫でを施す。12は脚付長頸壷である。外面および底部内面に灰被りが見られるが、肩部の沈線間に波状文、体部外面下半回転篦削り、底部外面撫で、他は回転撫でを施す。13は脚付鉢である。体部上半外面カキ目、1条凹線、下半回転篦削り、他は回転撫でを施す。外面に灰被りが見られる。14～17は平瓶である。14は体部外面上半カキ目、底部外面篦削り、他



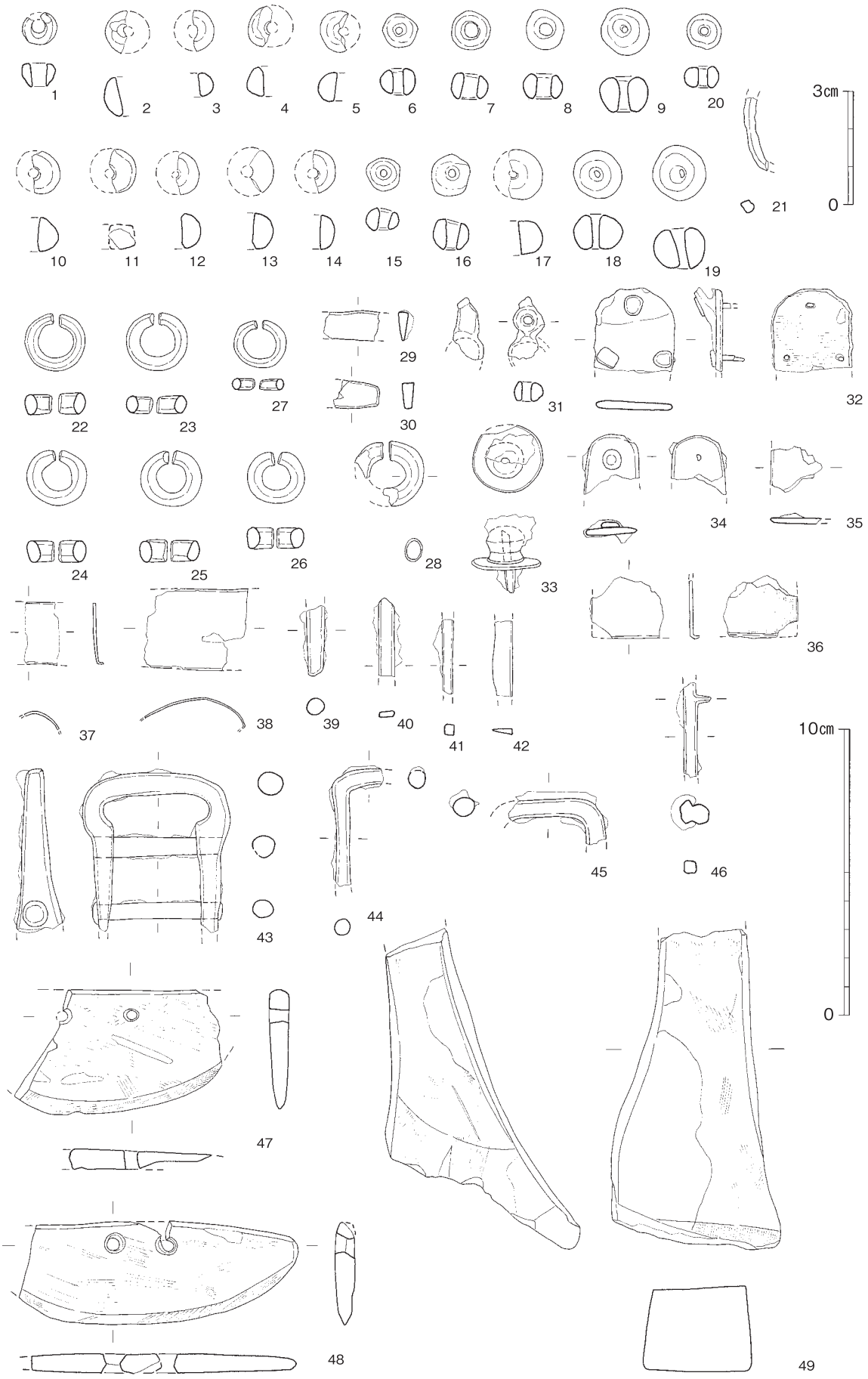
第125図　皿山古墳群Ⅲ-2号墳出土遺物実測図2（1～3は1/3、4～8は1/6）



第126図　皿山古墳群Ⅲ-２号墳出土遺物実測図3（1/3、8・9は1/6）



第127図　皿山古墳群Ⅲ- 2号墳出土遺物実測図4（1/3）



第128図　皿山古墳群Ⅲ- 2号墳出土特殊遺物実測図（1 ～ 21は2/3、他は1/2）

は回転撫でを施す。底部内面に灰被りが見られる。15・16は口縁部のみが遺存しており、共に回転撫でを施す。15は外面に灰被りが見られ、14と同一個体の可能性もある。17は体部外面上半カキ目、下半削り後回転撫で、口縁横肩部内面および底部内面撫で、他は回転撫でを施す。墓道および墳丘前面表土出土破片と接合しており、本来は盛土上に並べられたものである可能性がある。第125図1〜8は甕である。いずれも体部外面叩き、内面当て具痕、口縁部回転撫でを施す。2は外面に叩きの後に刷毛状の痕跡が見られ、3は口縁部に×の篦記号が施される。4・7は内外面に自然釉がかかり、7は底部付近に焼成時に固定するための支えとした杯の痕跡が3つ残る。この他にも墳丘前面右側の周溝では木の根に取り込まれた形で須恵器が出土しており、前面側を中心として土器が出土している。

第126図1〜10は盛土上出土である。1は蓋である。天井部外面回転篦削り、他は回転撫でを施す。2は杯身である。回転撫でを施す。3は高杯である。外面に3条の凹線およびシボリ状の痕跡が残る。4は瑳である。口縁部のみが遺存し回転撫でを施す。5は鉢である。肩部に凹線、他は回転撫でを施す。外面に灰被りが見られる。6は平瓶である。灰被りのため明瞭ではないが、体部外面叩き後回転撫で、内面下半指頭圧痕、底部外面手持ちの削り、内面不定方向撫で、他は回転撫でを施す。墓道・周溝出土破片と接合するが本来は盛土上に置かれていたものと考えられる。7〜9は甕である。7・8は体部外面叩き後撫で、内面当て具痕、他は回転撫でを施す。9は口縁部外面縦刷毛、内面回転撫で、体部外面叩き後カキ目、内面当て具痕を施す。10は器台である。歪みが著しいが本来は内彎するものか。外面1ないしは2条の凹線間に櫛描刺突文、内面回転撫でを施す。

11は石室内撹乱出土の須恵器甕である。内外面回転撫でを施し、自然釉が見られる。

第127図は墓道出土である。ほとんどは墓道と周溝が交わる付近で出土しており、19は閉塞前面から出土している。1〜5は須恵器の蓋である。3〜5は返りおよびボタン形のつまみを持つものである。概ね天井部外面回転篦削り、内面不定方向の撫で、他は回転撫でを施す。3・4は外面に灰被りが見られる。6〜8は壷である。7・8の外面にカキ目、7の底部外面回転篦削り、他は回転撫でを施す。8の外面半分に灰被りが見られる。9〜16は高杯である。概ね杯部底部内面に不定方向の撫で、他は回転撫でを施す。9・12は灰被りならびに自然釉が見られる。15は内面に線刻が施される。17〜21は瑳である。19の体部外面下半回転篦削り、底部外面撫で、20の体部下半手持ちの削り、21の体部上半カキ目、下半回転篦削り、他は回転撫でを施す。19は穿孔時の粘土塊が内部に付着し、そのまま焼成されている。20の孔上端部に位置する沈線両側にキザミ、21の体部上半に4本の線刻が施される。22は平瓶である。摩滅するが、概ね回転撫でを施す。23は脚付長頸壷である。壷部下半に回転篦削り、他は回転撫でとカキ目を施す。24は土師器の杯である。摩滅のため調整は不明である。

その他

第126図12は墳丘出土の弥生土器甕である。摩滅のため調整不明である。第128図47・48は石庖丁である。共に外彎刃半月形で、輝緑凝灰岩製である。47は外孔0.5、内孔0.4、背孔0.9、孔間2.4cmを測り、48は外孔0.7、内孔0.45、背孔0.8、孔間1.9cmを測る。48はやや幅が短く、使用度が高いものと考えられる。49は砥石である。4側面を砥面とし、金属製刃器の研磨痕が数箇所に見られる。下面も割れ面の中に研磨痕が見られ、研磨による成形というよりも砥面として数回使用したものか。表面に土壌の影響で鉄分が付着する。細粒砂岩製。いずれも古墳築造の際の混入品と考えられる。

3）小　結

皿山古墳群Ⅲ区では2基の円墳が検出された。墳丘規模では1号墳よりも2号墳の方が径・高さ共に大きい。副葬品の面からは共に盗掘を受けているため明確ではないが、石室内埋土のふるい作業でも馬具・玉類の破片が見つからなかった1号墳と馬具や玉類を明確に持つ2号墳という差異が認められる。規模・副葬品の両面から見て、両円墳の被葬者間には階層差があると言えよう。切り合い関係から、まず、階層の高い被葬者を葬るための2号墳が築造された後、さほど時期をおかずに、1号墳が築造されたものと考えられる。また、西方にある皿山古墳群Ⅰ区との関係についてはⅠ区では同じく全て盗掘を受けているものの刀剣類や馬具、玉類が本調査区よりも多量に出土しており、また規模も大きいことから、Ⅰ区とⅢ区の間にも階層差があることが指摘できる。

挿図	登録番号	図版番号	区	出土遺構	種類	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	残存	備考
118-1	70017	89	Ⅲ	1号墳石室内	銅製品	耳環	2.80	3.25	0.70	16.64	1	
118-2	70024	89	Ⅲ	1号墳石室敷石下	鉄製品	刀子	(5.80)	1.60	0.40	(8.75)	0.3	
118-3	50002	89	Ⅲ	1号墳盛土	石製品	打製石鏃	(3.05)	1.70	0.35	(1.39)	0.9	安山岩
128-1	90001		Ⅲ	2号墳石室内	ガラス製品	丸玉	0.90		0.65	(0.28)	0.7	
128-2	90002		Ⅲ	2号墳石室内	ガラス製品	丸玉	1.10		1.05	(0.83)	0.4	
128-3	90003		Ⅲ	2号墳石室内	ガラス製品	丸玉	1.10		0.65	(0.78)	0.5	
128-4	90004		Ⅲ	2号墳石室内	ガラス製品	丸玉	1.00		0.80	(0.61)	0.4	
128-5	90005		Ⅲ	2号墳石室内	ガラス製品	丸玉	1.05		0.80	(0.88)	0.5	
128-6	90006		Ⅲ	2号墳石室内	ガラス製品	丸玉	0.95		0.70	1.23	1	
128-7	90007		Ⅲ	2号墳石室内	ガラス製品	丸玉	1.00		0.70	1.11	1	
128-8	90008		Ⅲ	2号墳石室内	ガラス製品	丸玉	1.00		0.65	1.37	1	
128-9	90009		Ⅲ	2号墳石室内	ガラス製品	丸玉	1.30		0.70	4.14	1	
128-10	90011		Ⅲ	2号墳石室内	ガラス製品	丸玉	1.10		0.90	(1.16)	0.5	
128-11	90012		Ⅲ	2号墳石室内埋土中	ガラス製品	丸玉	1.15		(0.55)	(0.54)	0.3	
128-12	90013		Ⅲ	2号墳石室内埋土中	ガラス製品	丸玉	1.15		0.90	(1.03)	0.5	
128-13	90014		Ⅲ	2号墳石室内埋土中	ガラス製品	丸玉	1.15		0.95	(1.00)	0.4	
128-14	90015		Ⅲ	2号墳石室内埋土中	ガラス製品	丸玉	1.15		0.90	(0.86)	0.5	
128-15	90016		Ⅲ	2号墳石室内埋土中	ガラス製品	丸玉	0.85		0.60	(0.68)	0.8	
128-16	90017		Ⅲ	2号墳石室内埋土中	ガラス製品	丸玉	1.10		0.80	(1.30)	0.9	
128-17	90018		Ⅲ	2号墳石室内埋土中	ガラス製品	丸玉	1.30		0.90	(2.59)	0.6	
128-18	90019		Ⅲ	2号墳石室内埋土中	ガラス製品	丸玉	1.25		0.90	3.09	1	
128-19	90020		Ⅲ	2号墳石室内埋土中	ガラス製品	丸玉	1.40		1.10	4.09	1	
128-20			Ⅲ	2号墳石室内	石製品	丸玉	0.90		0.55	0.82	1	碧玉?
128-21	70008		Ⅲ	2号墳石室内	鉄製品	釧		0.30	0.30	(0.35)	0.1	
128-22	70025	89	Ⅲ	2号墳石室内埋土中	銅製品	耳環	2.00	2.20	0.70	8.10	1	金貼
128-23	70026	89	Ⅲ	2号墳石室内埋土中	銅製品	耳環	2.00	2.15	0.65	8.77	1	金貼
128-24	70018	89	Ⅲ	2号墳敷石下	銅製品	耳環	1.90	2.10	0.75	10.43	1	金貼
128-25	70015	89	Ⅲ	2号墳石室内	銅製品	耳環	2.00	2.15	0.75	11.07	1	金貼
128-26	70016	89	Ⅲ	2号墳石室内	銅製品	耳環	1.80	2.00	0.70	8.51	1	銀貼?
128-27	70027	89	Ⅲ	2号墳石室内埋土中	銅製品	耳環	1.80	1.80	0.40	2.29	1	金貼
128-28	70012	89	Ⅲ	2号墳	銅製品	耳環	2.20	2.40	0.80	(1.88)	0.6	中空
128-29	70022		Ⅲ	2号墳盛土中№5	鉄製品	不明鉄製品	(1.95)	1.10	0.40	(1.44)	0.1	
128-30	70021		Ⅲ	2号墳盛土中№5	鉄製品	刀子?	(1.55)	1.05	0.45	(1.29)	0.1	
128-31			Ⅲ	2号墳石室内埋土中	鉄製品	金具	(2.20)	(1.25)	(1.05)	(1.51)	0.2	
128-32	70023	89	Ⅲ	2号墳盛土中№5	鉄製品	金具	(3.00)	2.90	0.30	(6.62)	0.2	
128-33	70007	89	Ⅲ	2号墳敷石下	鉄製品	留金具	2.40	2.40	2.40	6.37	1	
128-34	70014	89	Ⅲ	2号墳	鉄製品	金具	(2.10)	1.95	0.30	(1.76)	0.2	
128-35	70004		Ⅲ	2号墳敷石下	鉄製品	金具	(1.60)	(1.85)	0.25	(1.43)	0.1	
128-36	70006	89	Ⅲ	2号墳敷石下	鉄製品	金具	(2.20)	(2.55)	0.15	(2.37)	0.1	
128-37	70005		Ⅲ	2号墳敷石下	鉄製品	不明鉄製品	2.15	(1.25)	0.15	(1.40)	0.1	
128-38	70013		Ⅲ	2号墳	鉄製品	不明鉄製品	2.95	(3.60)	0.05	(3.44)	0.4	
128-39	70010		Ⅲ	2号墳敷石下	鉄製品	不明鉄製品	(2.50)		0.65	(1.75)	0.1	
128-40	70011		Ⅲ	2号墳	鉄製品	不明鉄製品	(2.70)	0.60	0.25	(1.26)	0.1	
128-41	70019		Ⅲ	2号墳盛土中№5	鉄製品	鉄鏃	(2.65)	0.40	0.40	(1.16)	0.1	
128-42	70020		Ⅲ	2号墳盛土中№5	鉄製品	鉄鏃	(2.65)	0.70	0.30	(0.94)	0.1	
128-43	70003	89	Ⅲ	2号墳敷石下	鉄製品	鉸具	(5.60)	5.20	1.70	(29.72)	0.8	
128-44	70009		Ⅲ	2号墳敷石下	鉄製品	鉸具	(4.10)	(1.80)	0.70	(3.57)	0.1	
128-45	70002		Ⅲ	2号墳墓道	鉄製品	鉸具	(1.70)	(3.40)	0.80	(5.77)	0.2	
128-46	70001		Ⅲ	2号墳盛土中№5	鉄製品	鉸具	(3.25)	(0.95)	0.80	(1.83)	0.1	
128-47	50003	89	Ⅲ	2号墳盛土中	石製品	石庖丁	(7.30)	4.40	0.75	(27.91)	0.6	輝緑凝灰岩
128-48	50004	89	Ⅲ	2号墳盛土中	石製品	石庖丁	(9.70)	3.60	0.70	(32.52)	0.8	輝緑凝灰岩
128-49	50001		Ⅲ	2号墳盛土中№5	石製品	砥石	(11.20)	5.95	6.80	(260.00)	0.5	細粒砂岩

(　　)は残存値

表10　皿山古墳群Ⅲ区特殊遺物一覧表

Ⅳ　終わりに

最後に、いくつかの問題を提起してまとめとする。

1　皿山古墳群Ⅰ区下層の遺構と遺物

「Ⅱ　位置と環境」で触れたように、この山国川左岸の河岸段丘上では旧石器〜縄文時代の遺物が頻出している。殊に金居塚古墳群では3基の古墳の下層、いわゆる「旧地表」及びその下位の風化土層から、石組炉1基や主として旧石器・縄文時代後期の数百点に上る石器・剥片などが出土した。この金居塚遺跡では弥生時代の遺構として数基の石蓋土壙墓が古墳下層に造営されていたものの、古墳築造以前の遺構が乏しく遺物包含層が比較的良好に保存されていた。一方、皿山古墳群Ⅰ区では1〜3号墳の下層や古墳周辺に竪穴住居跡や掘立柱建物跡が存在している。決して稠密というわけではないが、弥生中期後半から後期前半にかけての集落が営まれていて、遺構の空白部も何らかの土地使用がなされていたと見るべきであろう。その活動の中で、それ以前の生活の痕跡の多くが失われたものと思われる。しかし、なおこの段丘上には数十基、数百基の古墳が存在していて、いずれ良好な旧石器時代〜縄文時代前半期の遺跡が発見されることを期待している。

なお、1号墳下層出土の三稜尖頭器については、先端部を僅かに欠損するもののほぼ完形品であり、山国川下流域での出土例は希少である。遺跡立地や単体での出土状況から、狩猟など消費地的な在り方を示しているかも知れない。今のところ同様の技術形態をもつものは豊前平野まで認められるが、より北側の京都平野では認められない。今後、京築地域における三稜尖頭器の広がりや地域性を考える上でも重要である。

2　ガサメキ古墳群出土の特異な遺物

ガサメキ古墳群2−1号墳は、古墳自体は直径10mほどのごく一般的な後期群集墳中の円墳であるが、出土遺物に特異なものがある。一つは異形の土器（図版12、第12図）であり、今一つは辻金具である（図版13、第9図）。

異形の土器については、口縁部を欠くために本来の形状は不明であるが、正岡睦夫氏がかつて報告した土器に類似したものがある[註1]。愛媛県越智郡玉川町（現今治市）の破壊された古墳出土とされる、平底で張りの強い体部をもつ瓶子形の壺の口縁部に通有の杯身を縦位に付す形態の須恵器である。正岡氏によれば、類例は大阪府鬼虎川遺跡、奈良県桜井市外山（東博蔵）、韓国慶尚北道高霊郡（慶州博蔵）、韓国慶尚北道高霊郡延詔洞（韓国中央博蔵）、全羅北道扶安郡辺山面格浦里竹幕洞、全羅北道益山郡熊浦面熊浦里、忠清南道礼山郡鳳山面花田里、出土地不詳（晋州博蔵）と国内3例、朝鮮半島南部で6例があるといい、いずれもが平底の壺形の体部に杯身を付したような形状となっている。氏は報告の中で朝鮮半島南部からの将来の可能性を指摘する。

ガサメキ古墳群2−1号墳の例でいえば、体部が提瓶の形状をしている点で先に挙げた諸例と異なっているが、通常円板で塞ぐ成形時の開口部を絞って塞ぐなどここでも異例の手法を使っている。このような絞り痕は初期須恵器の内底面に往々にして見られるが、短期間で廃れる技法である。酒井清治氏によれば、この絞って塞ぐ技法は朝鮮半島では6世紀代の中甕・提瓶にも見られ、また群馬県金山丘陵窯跡群では「主体的な技法」として使用されるという。「提瓶」を絞って塞ぐ例として大阪・石川・群馬、「平瓶」を絞って塞ぐ例として大阪・石川・岡山・大分などの遺跡が例示さ

れている。このガサメキ古墳群の異形土器の系譜を推測する上で、正倉院に残る大宝二年（702）「豊前国上三毛郡塔里」戸籍が示唆的である。この戸籍では渡来人系の集団に属していたとされる「秦部」・「勝」の姓が8割以上を占めている。「塔里」については上毛町上唐原・下唐原、そこから6㎞ほど北西に位置する豊前市塔田が比定地で断定は難しいが、近年になって塔田琵琶田遺跡でいわゆるオンドル状のカマドを伴う竪穴住居跡が数多く発見されている。時期が随分異なるが、「塔里」は「塔田」であるかも知れない。いずれにしてもガサメキ古墳群周辺に渡来系氏族の存在が想定されることから、朝鮮半島との繋がりを無視できないといえよう。

辻金具の脚部に見られた方形の剥離痕についても類例をあまり見ないが、6世紀後半に築造された福岡市西区浦江古墳群1号墳出土の辻金具では同じ場所にイモ貝が付されている。[註3] この古墳は近接する10基の古墳群中最大規模（墳径20m余）であり、かつ唯一「渦文」を彩色された装飾古墳で鉄地金銅張ｆ字形鏡板や同三葉文楕円形杏葉等を供伴する有力な古墳である。ガサメキ古墳群2−1号墳は群集墳中の1小古墳で、性格を異にしていて直接比較はできないが、辻金具脚部の装飾の類例として挙げておく。

3　皿山古墳群と穴ヶ葉山古墳群について

Ⅰ−1号墳は盛土の直径16m、墳裾に2m弱の犬走り状の平坦面を付し、さらに幅3mほどの周溝をもつ。周溝を含めた規模は直径25mほどとなる。北西1㎞に位置する線刻壁画をもつ史跡穴ヶ葉山古墳は盛土径27〜30m、周溝は完周しないがそれを含めた規模は33〜42mであり、皿山1号墳との規模の差は明らかである。また、穴ヶ葉山古墳は斜面に占地するために下位斜面側にテラスを造って部分的に段築成としている。主体部の規模を比べると皿山1号墳が玄室−羨道長約7.0m、全長8.5mを測るのに対し、穴ヶ葉山古墳は玄室−羨道長が9m弱であり、墳丘規模ほどの差ではないがやはり穴ヶ葉山古墳の主体部の規模が上回る。また、穴ヶ葉山古墳では玄室3壁を各1枚、羨道側壁を3〜4枚の巨石で構成するのであるが、玄室平面プランも併せてこれは投入した労働力の大きさとともに築造の時期差をも反映している。

しかし、古墳群の在り方は7基前後で構成される皿山古墳群、5基ほどで構成される穴ヶ葉山古墳群はいずれもそれぞれの古墳が一定程度の距離をもって散在する点で似る。皿山古墳群の北1㎞弱の同じ段丘肩に位置する金居塚古墳群では、周溝を含めた規模で直径10〜30mの16基の円墳が墳裾あるいは周溝を接するように密集している。そして、段丘法面にも同時期の横穴墓20基ほどが掘り込まれていた。既報告の卑近な遺跡では上ノ熊古墳群[註4]・ガサメキ古墳群1区[註5]が互いに接するように築造されており、ガサメキ古墳群2区・穴ヶ葉山南古墳群[註6]などは散在型といってよい。群集・散在・孤立といった立地状況がどのような社会的階層を反映しているかを考えるには、まだまだ資料を欠いている。今後に期待したい。

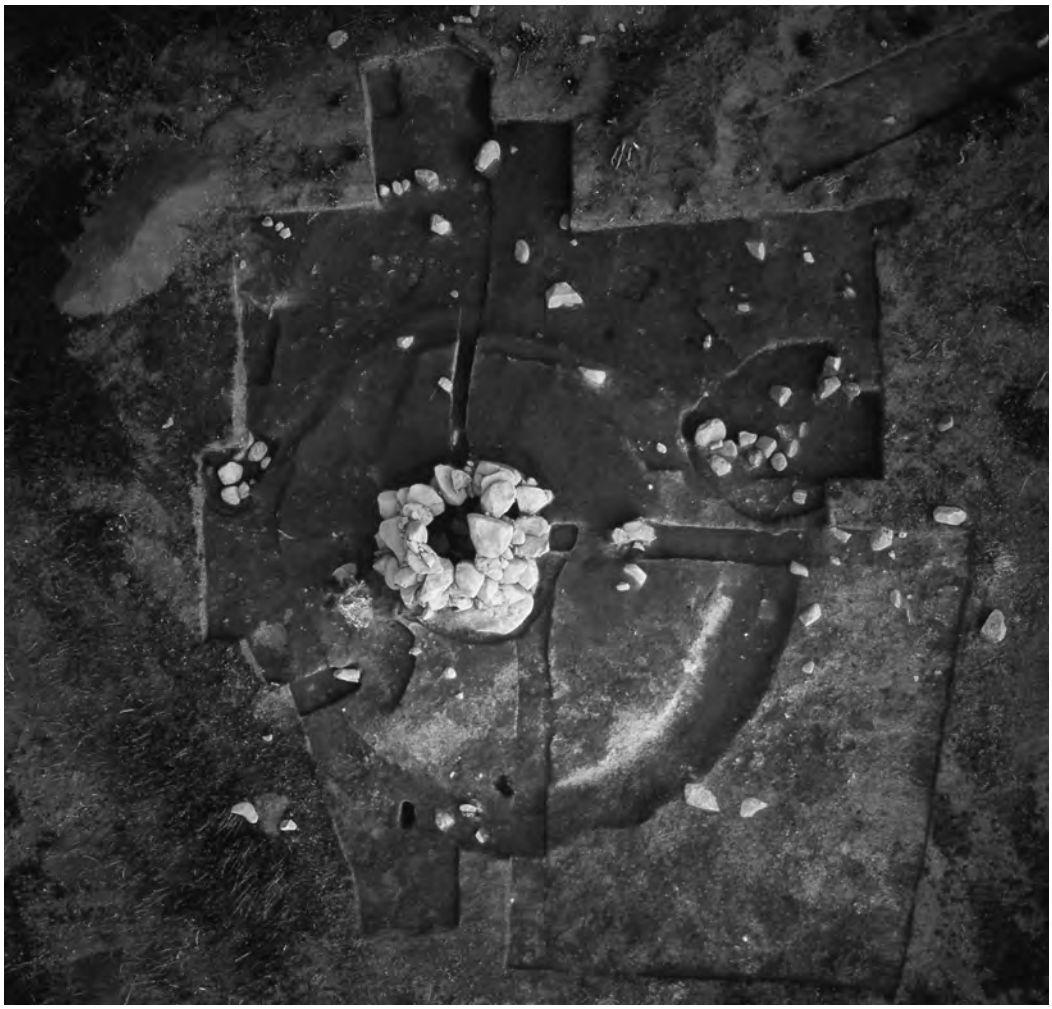
註

1　正岡睦夫「愛媛県玉川町出土の杯付壺と鈴付椀」（『古文化談叢』第31集、1993）
2　福岡市教育委員会「浦江古墳群1号墳」（『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第862集、2005）
3　駒澤大学考古学研究室『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅰ』2007
4　大平村教育委員会「上ノ熊古墳群」（『大平村文化財調査報告書』第1集、1978）
5　上毛町教育委員会「大久保楢迫4号墳　ガサメキ古墳群　緒方1号墳」（『上毛町文化財調査報告書』第18集、2014）
6　大平村教育委員会「穴ヶ葉山南古墳群」（『大平村文化財調査報告書』第2集、1984）

図　　版

1　遺跡全景
（北東上空から）

2　遺跡全景
（南西上空から）



1　2–1号墳全景
（上空から）

2　2–2号墳全景
（上空から）

1　2−1号墳現況（南西から）

2　2−1号墳現況（西から）

3　2−1号墳主体部現況（南東から）

1　2−1号墳墳丘土層（北西から）

2　2−1号墳北東畦土層（北西から）

3　2−1号墳南西畦土層（西から）

1　2−1号墳南東畦土層（南西から）

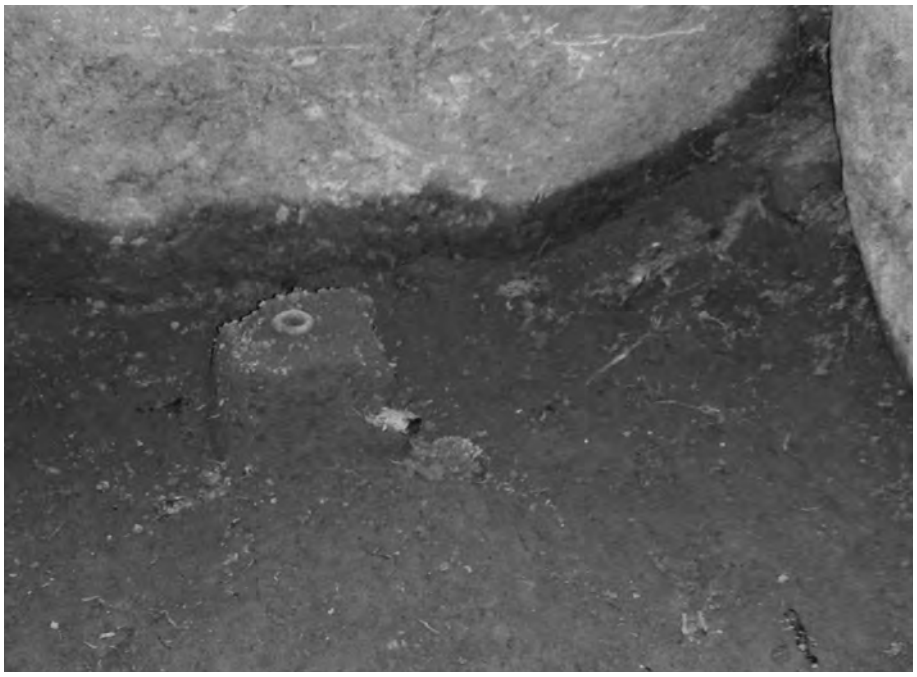
2　2−1号墳閉塞状況（北西から）

3　2−1号墳框石（南東から）

1　2–1号墳奥壁（北西から）

2　2–1号墳右側壁（北から）

3　2–1号墳左側壁（南西から）



1　2−1号墳耳環出土状況
（北西から）

2　2−1号墳大刀出土状況
（南東から）

3　2−1号墳2号土坑（北西から）

1　2–2号墳現況（南東から）

2　2–2号墳北西畦土層（北から）

3　2–2号墳北東畦土層
（南東から）

1　2−2号墳南西畦土層（東から）

2　2−2号墳墓道断割り状況
（南から）

3　2−2号墳閉塞状況（南東から）

1　2−2号墳閉塞状況（北西から）

2　2−2号墳耳環出土状況
（南東から）

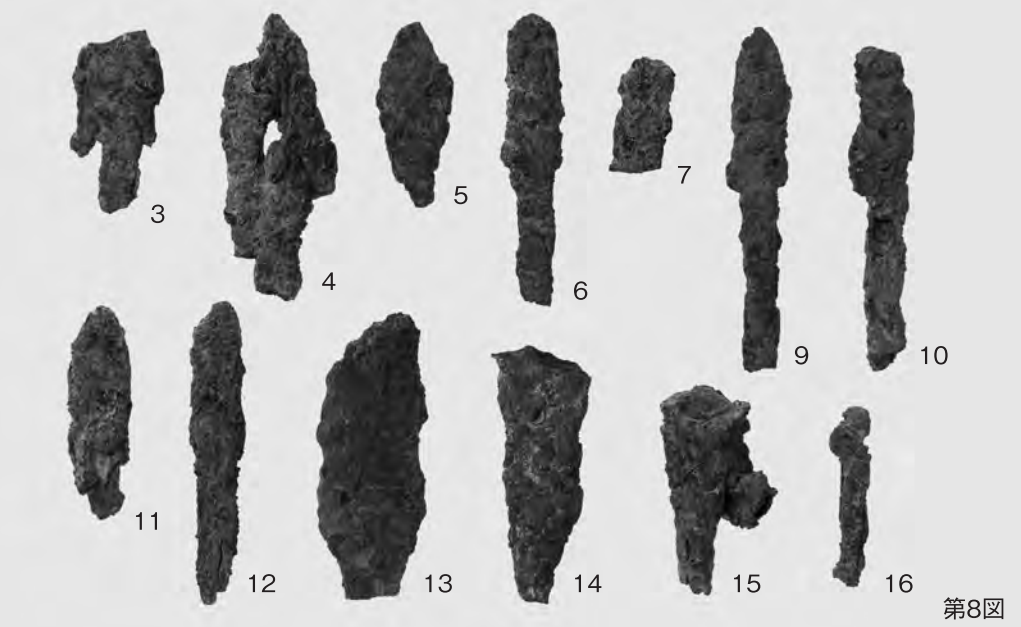
3　2−2号墳主体部撹乱状況
（南東から）

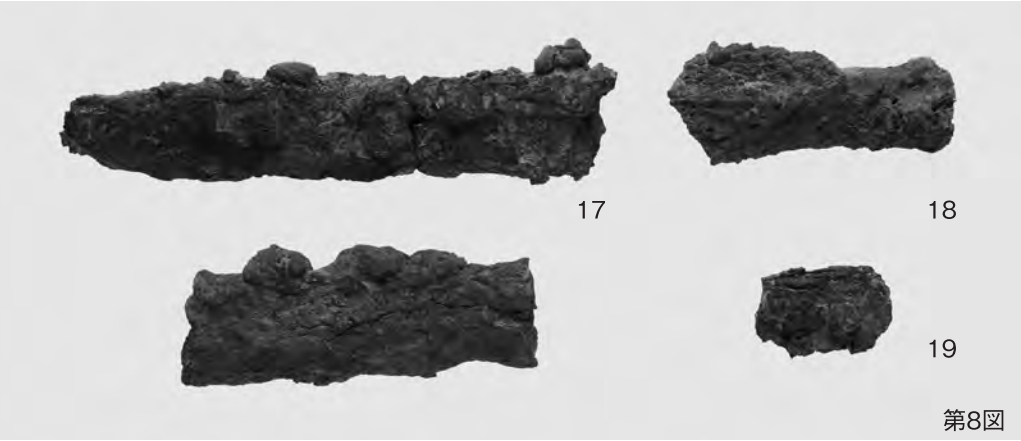
1　2–2号墳主体部完掘後
（南東から）

2　2–2号墳奥壁（南東から）

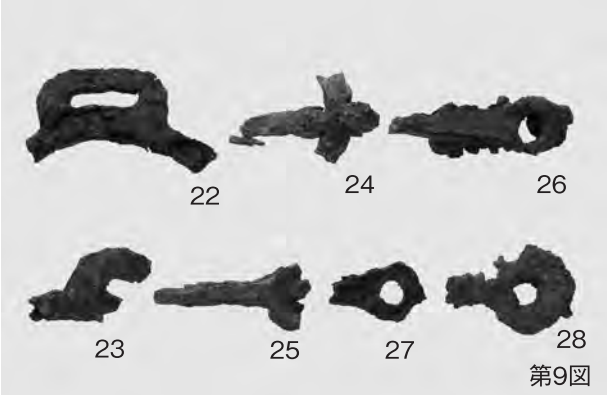
3　2–2号墳袖石（北西から）

図版12

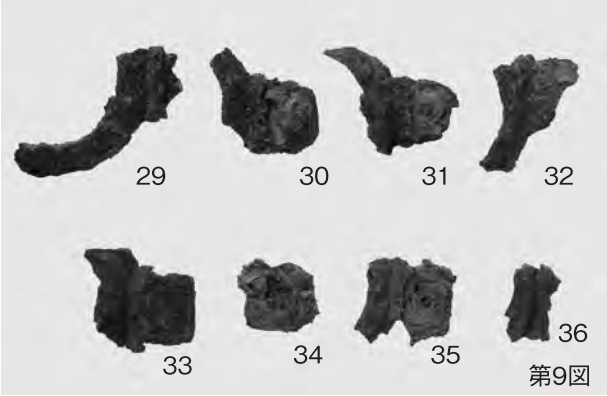




ガサメキ古墳群2区出土遺物1



第9図

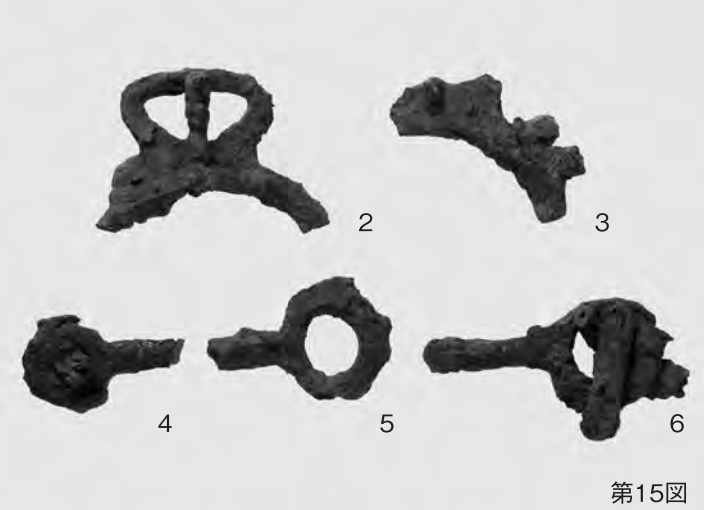


第9図

第9図

第10図

第15図1



第15図

第18図1

第18図

ガサメキ古墳群2区出土遺物2

1　3区調査全景（南東から）

2　3-1号墳全景（南西から）

3　3–1号墳墳丘内石列検出状況
（南西から）

1　3–1号墳墳丘内石列検出状況
（南東から）

2　3–1号墳墳丘土層（北から）

3　1–1号墳周溝・墳丘土層
（南東から）

1　3–1号墳主体部奥壁（南西から）

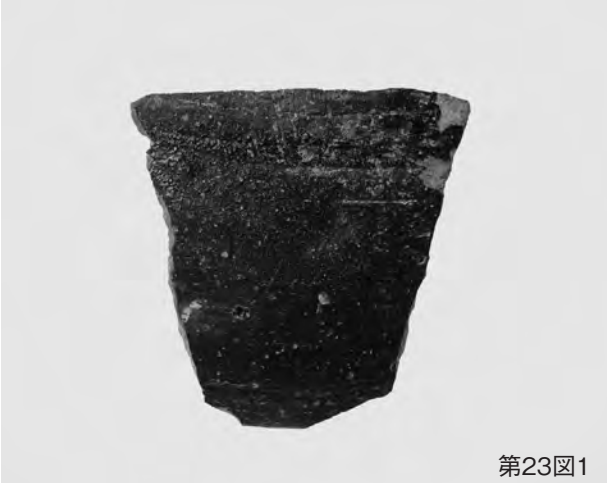
2　3–1号墳主体部前壁（北東から）

3　3–1号墳主体部前壁・
閉塞石除去後（北東から）

1　3−1号墳閉塞状況（南西から）

2　3−1号墳羨道部土器出土状況（北東から）

3　3−2号墳トレンチ（北東から）


第23図1

第23図2

第23図3

第23図4

第23図5

第23図6

ガサメキ古墳群3区出土遺物（3–1号墳）

1　皿山古墳群Ⅰ区遠景
（東から）

2　皿山古墳群Ⅰ区全景
（上が北）

1　Ⅰ–1 ～ 3号墳遠景
（東から）

2　1号墳全景
（南東から）

1　Ⅰ−2号墳完掘状況
及び石室堀方状遺構
（南東から）

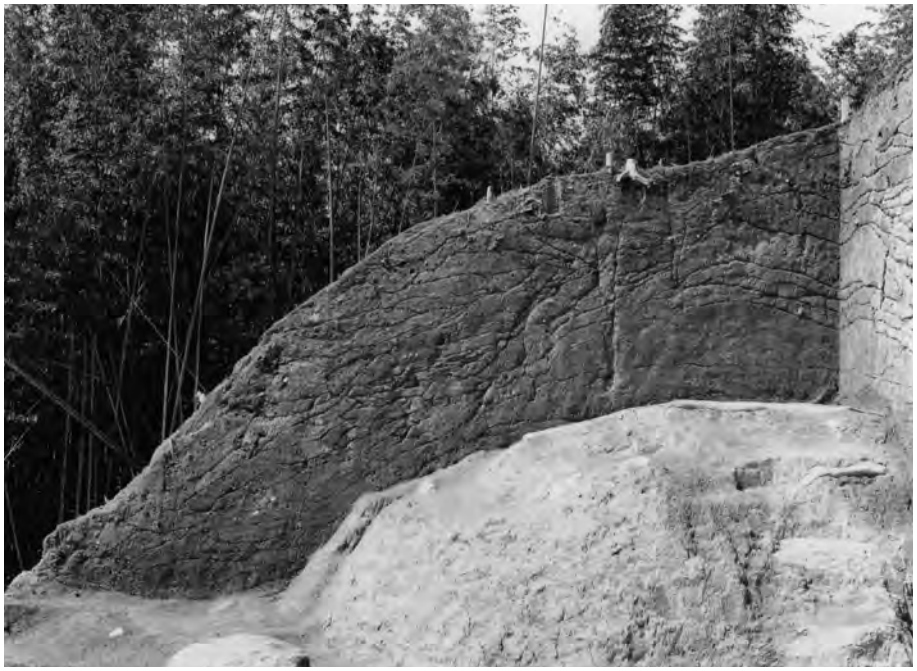
2　Ⅰ−2・4・5号墳全景
（上が北西）

1　Ⅰ−1号墳墳丘南西−北東断面
（南東から）

2　Ⅰ−1号墳墳丘断面一次墳丘
（南東から）

3　Ⅰ−1号墳墳丘北東断面
（南東から）

1　Ⅰ−1号墳墳丘南西断面
（南東から）



2　Ⅰ−1号墳墳丘南東断面
（北東から）

3　Ⅰ−1号墳墳丘北側断面
（北から）

1　Ⅰ−1号墳墳丘北側断面土手部分土層

2　Ⅰ−1号墳東墳丘内列石
（東から）

3　Ⅰ−1号墳北東側周溝土層
（南東から）

1　Ⅰ−1号墳北側周溝内石出土状況
（北西から）

2　Ⅰ−1号墳南墳丘内土塊・列石
（南から）

3　Ⅰ−1号墳南墳丘内土塊・列石
（北から）

1　Ⅰ−1号墳南墳丘内土塊土層断面
（北西から）

2　Ⅰ−1号墳北東墳丘内土塊検出状況
（東から）

3　Ⅰ−1号墳墳丘北西土層断面
剥ぎ取り作業

1　Ⅰ−1号墳南墳丘裾土器集中部
（北西から）

2　Ⅰ−1号墳南墳丘裾土器集中部
（西から）

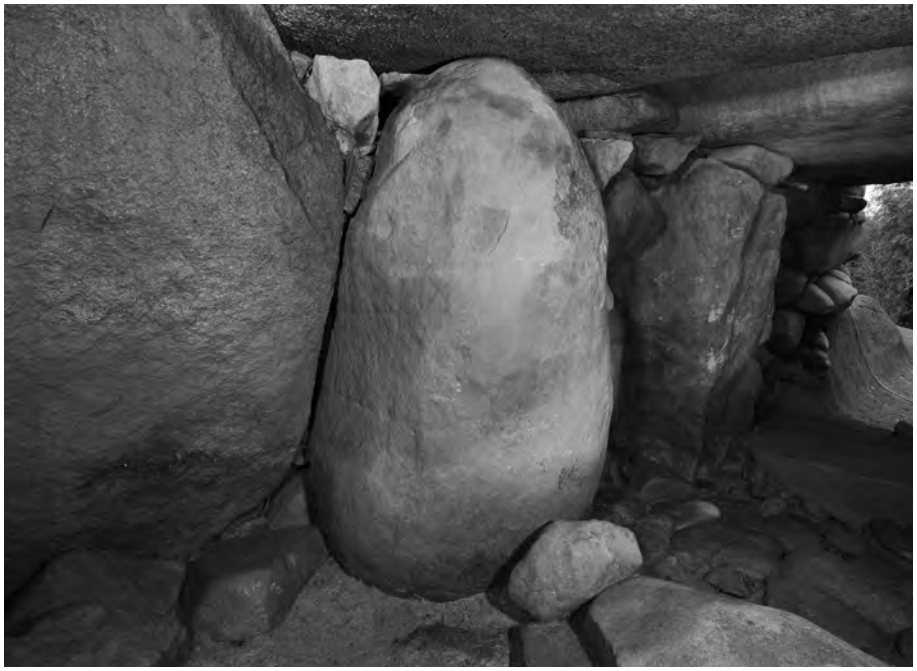
3　Ⅰ−1号墳南墳丘裾紡錘車
出土状況（南から）

1　Ⅰ−1号墳主体部内（南東から）

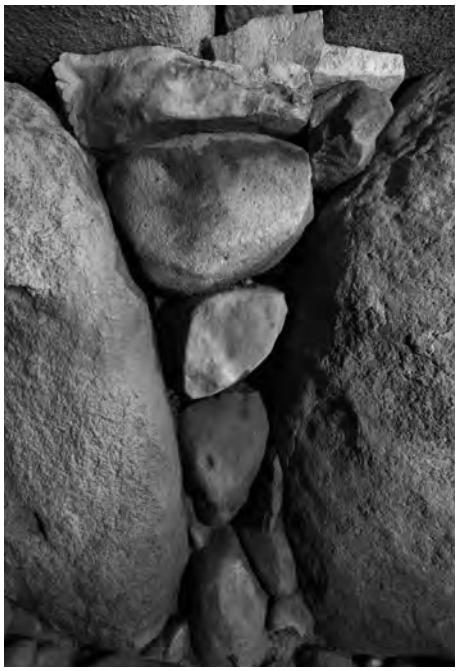
2　Ⅰ−1号墳玄室内（玄門から）

3　Ⅰ−1号墳玄室内（奥壁から）

1　I−1号墳左玄門（玄室から）



2　I−1号墳右玄門（玄室から）



3　I−1号墳前室左側壁
（前室から）

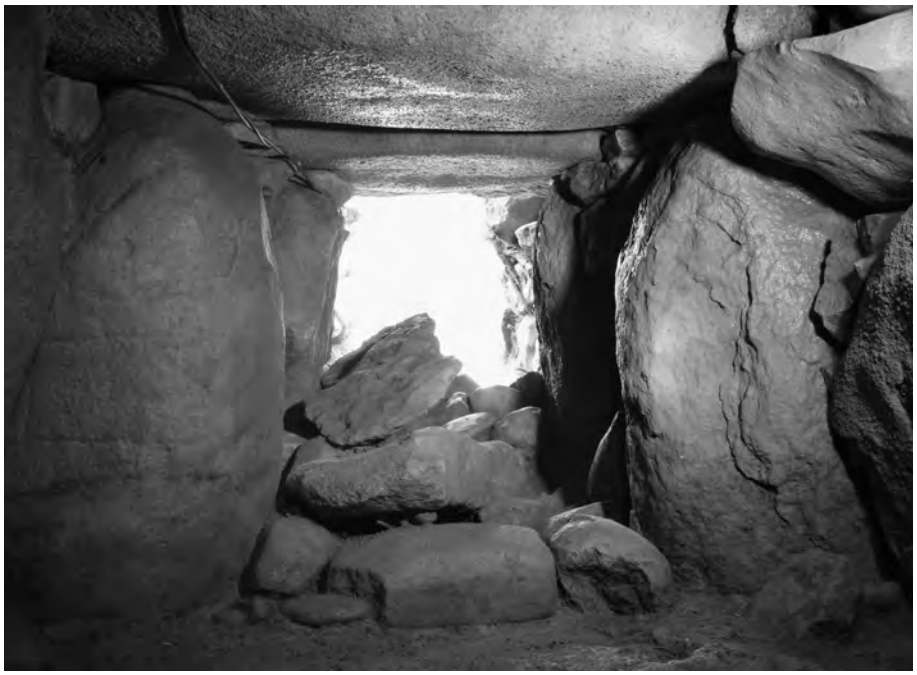
4　I−1号墳前室右側壁
（前室から）

3　4

1　Ⅰ−1号墳前室（羨道から）

2　Ⅰ−1号墳前室馬具出土状況
（上が右側壁）

3　Ⅰ−1号墳閉塞崩落状況
（羨道から）



1　Ⅰ−1号墳閉塞崩落状況
（玄室から）

2　Ⅰ−1号墳主体部天井石
（北西から）

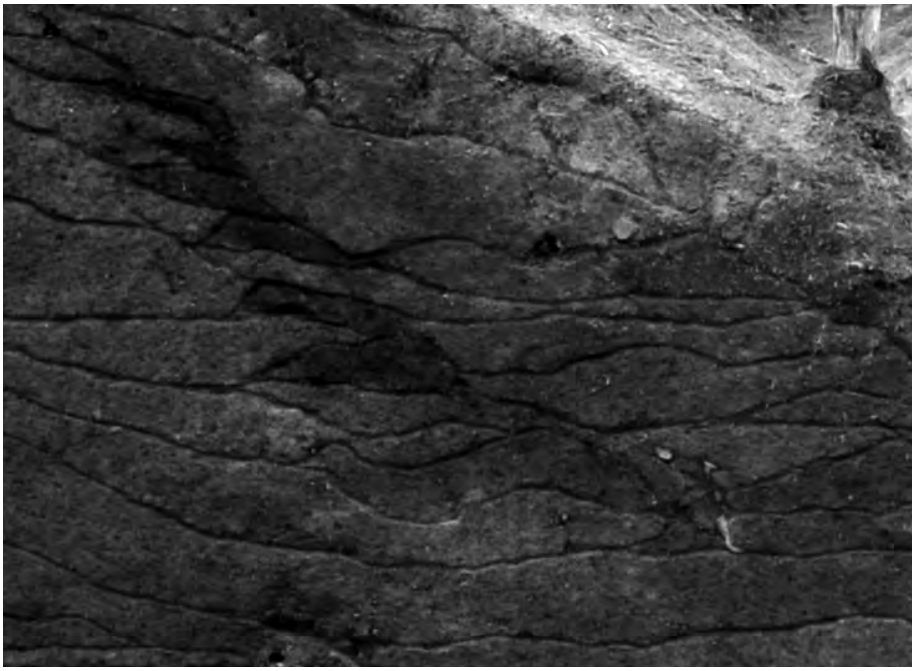
3　Ⅰ−1号墳石室堀方
（北西から）

1　Ⅰ−2号墳調査前現況（南から）

2　Ⅰ−2号墳南西−北東墳丘土層断面（南東から）

3　Ⅰ−2号墳南西墳丘土層断面（南東から）

1　Ⅰ−2号墳北東墳丘土層断面
（南東から）



2　Ⅰ−2号墳北東墳丘土層土手部分
土層

3　Ⅰ−2号墳周溝北東部土層断面
（北西から）

1　Ⅰ−2号墳南東墳丘土層断面
（北東から）

2　Ⅰ−2号墳北西墳丘土層断面
（黒い部分は土塊）（北東から）

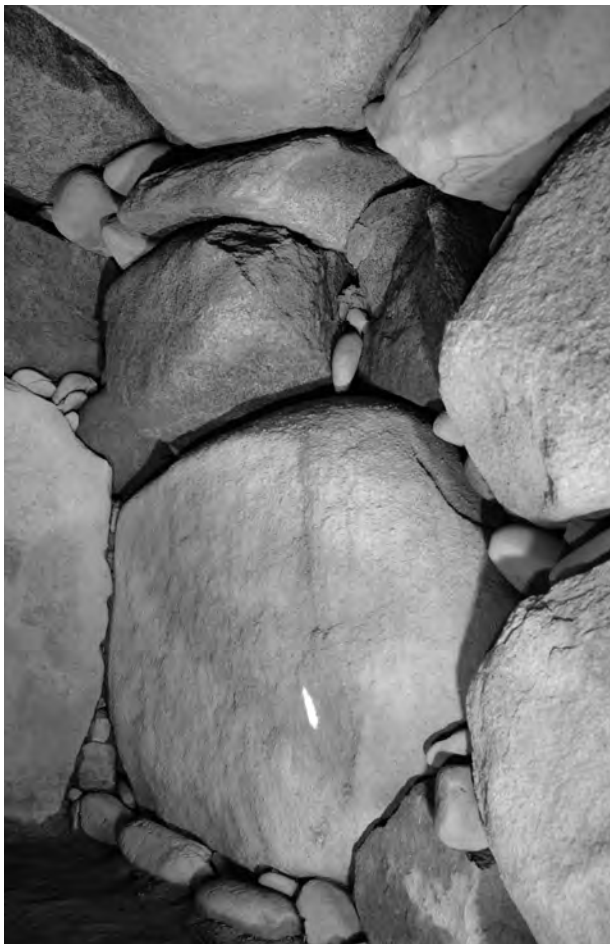
3　Ⅰ−2号墳主体部排水溝
（南東から）

1　Ⅰ−2号墳奥壁（玄門から）

2　Ⅰ−2号墳羨道右側壁
（墓道から）

3　Ⅰ−2号墳羨道左側壁
（墓道から）

1　Ⅰ−2号墳左側壁奥壁側（玄門から）



2　Ⅰ−2号墳右側壁奥壁側（玄門から）

3　Ⅰ−2号墳右側壁玄門側（奥壁から）

4　Ⅰ−2号墳左側壁玄門側（奥壁から）

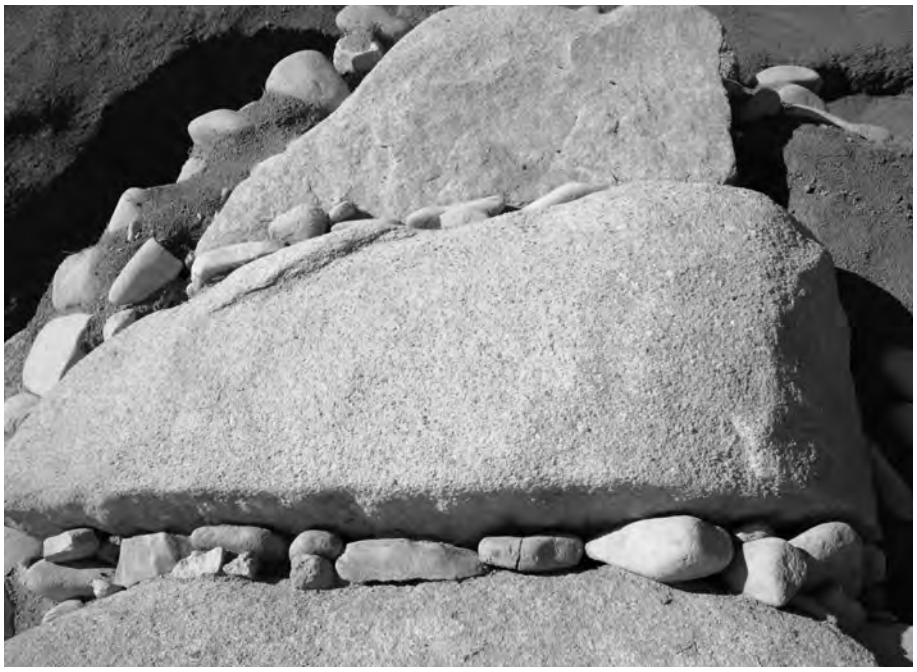
1　Ⅰ−12号墳閉塞石検出状況（上から）

2　Ⅰ−2号墳羨道敷石・小石検出状況（墓道から）

3　Ⅰ−2号墳羨道敷石検出状況（玄室から）

1　Ⅰ−2号墳羨道右側壁
（南西から）

2　Ⅰ−2号墳羨道左側壁
（北東から）



3　Ⅰ−2号墳主体部天井石
（北西から）

1　Ⅰ−2号墳石室掘方（西から）

2　Ⅰ−3号墳羨道天井石崩落状況（南東から）

3　Ⅰ−3号墳北西墳丘土層断面（北東から）

1　Ⅰ−3号墳周溝北西部土層断面
（北から）

2　Ⅰ−3号墳南西墳丘土層断面
（北西から）

3　Ⅰ−3号墳主体部（南東から）

1　（左）Ⅰ−3号墳羨道敷石
（南東から）
（右）玄室奥壁（南東から）

2　Ⅰ−3号墳羨道左側壁
（東から）

3　Ⅰ−3号墳墓道閉塞部土層断面
（南東から）

1　Ⅰ−3号墳石室堀方（北西から）

2　Ⅰ−4号墳調査前現況（南から）

3　Ⅰ−4号墳南西墳丘土層断面
（南東から）

1　Ⅰ−4号墳北西墳丘土層断面
（南西から）

2　Ⅰ−4号墳北東墳丘土層断面
（南東から）

3　Ⅰ−4号墳南東墳丘内列石2
（東から）

1　Ⅰ−4号墳東墳丘内列石（東から）

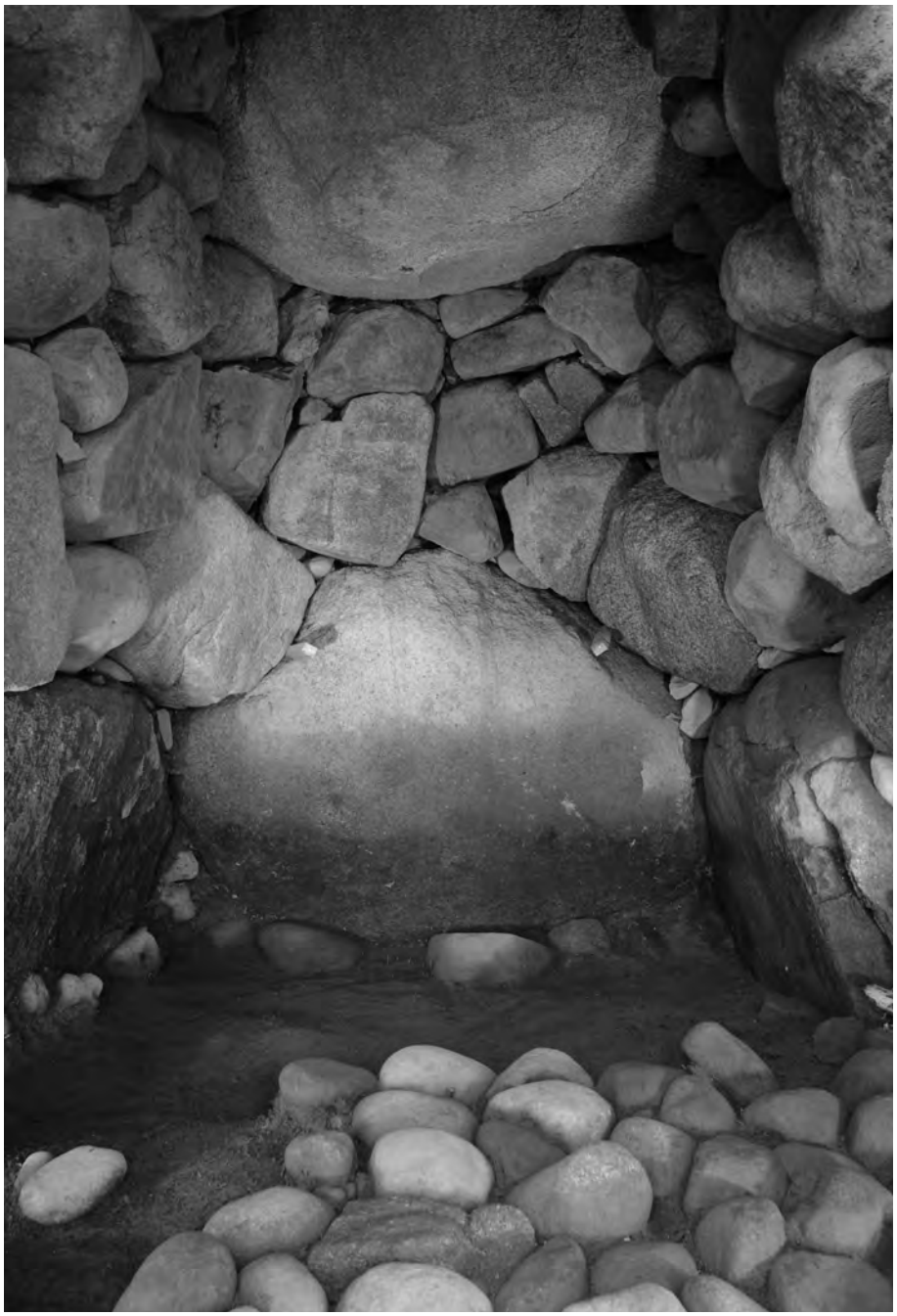
2　Ⅰ−4号墳閉塞状況（上が北）

3　Ⅰ−4号墳玄室（玄門から）

1　Ⅰ−4号墳玄室右側壁
（玄門から）

2　Ⅰ−4号墳玄室左側壁
（玄門から）

3　Ⅰ−4号墳羨道敷石検出状況
（玄門から）



1　Ⅰ–4号墳玄室内（玄門から）

2　Ⅰ–4号墳玄室敷石検出状況
（奥壁から）

1　Ⅰ−4号墳羨道左側壁
（東から）

2　Ⅰ−4号墳羨道右側壁
（南から）

3　Ⅰ−4号墳主体部（南東から）

1　Ⅰ−4号墳北西側周溝土器
出土状況(北から)

2　Ⅰ−4号墳羨道鉄製品出土状況
(玄室側から)

3　Ⅰ−4号墳墳丘除去状況
(南西から)

1　Ⅰ−5号墳完掘状況（東から）

2　Ⅰ−5号墳玄室検出状況
（東から）

3　Ⅰ−5号墳玄室崩落石除去状況
（南東から）

1　Ⅰ–5号墳玄室排水溝検出状況（東から）

2　Ⅰ–5号墳羨道左側壁（東から）

3　Ⅰ–5号墳羨道閉塞状況（東から）

1　石室掘方状遺構埋土堆積状況
（北西から）

2　石室掘方状遺構（南東から）

3　石室掘方状遺構
（北、4号墳墳頂から）

1　石材採取遺構（北東から）

2　石材採取遺構南側土層断面
（南から）

3　石材採取遺構（南東から）

第32図1

第32図2

第33図4

第34図40

第34図45

第34図47

第34図53

第34図55

第34図56

第35図68

第35図69

皿山古墳群Ⅰ−1号墳出土土器1

第35図73

第36図89

第35図85

第36図90

第36図103

第36図107

第36図91

皿山古墳群Ⅰ−1号墳出土土器2

第36図109

第36図119

第36図120

第36図123

第37図125

第37図126

第37図127

第38図130

皿山古墳群Ⅰ−1号墳出土土器3

第37図131

第38図150

第39図155

第39図156

第40図157

第40図158

第41図159

皿山古墳群Ⅰ−1号墳出土土器4

第42図165

第49図6

第43図172

第49図23

第54図8

第49図9

第60図13

皿山古墳群Ⅰ-1～4号墳出土土器

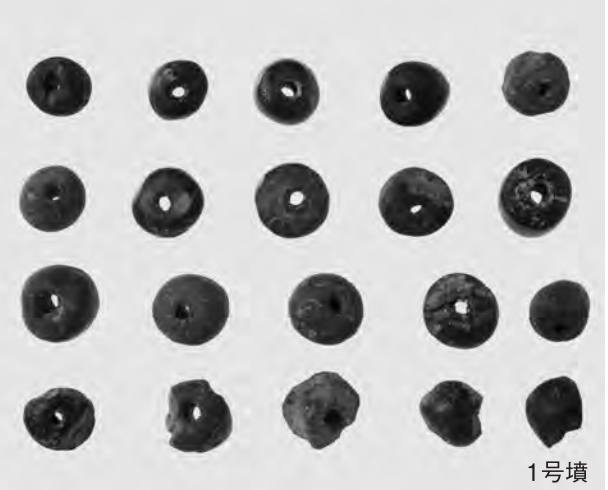
第60図3

第61図32

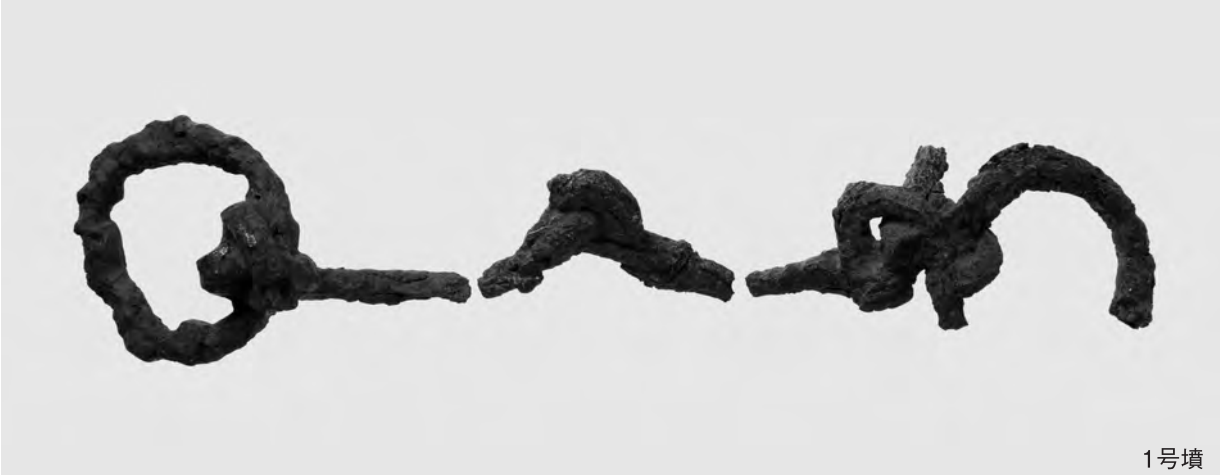
第60図15

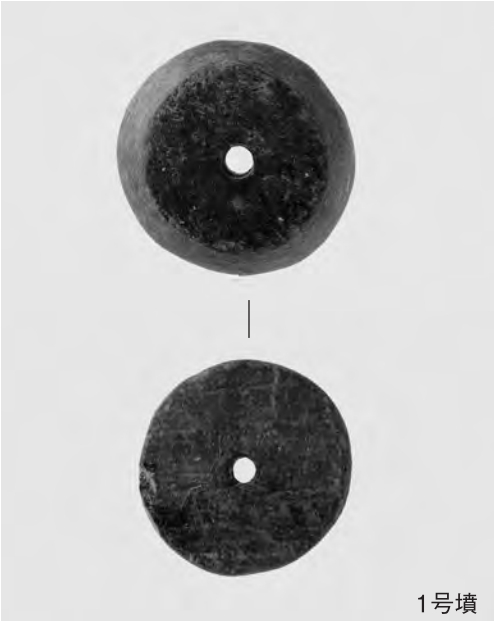
1号墳

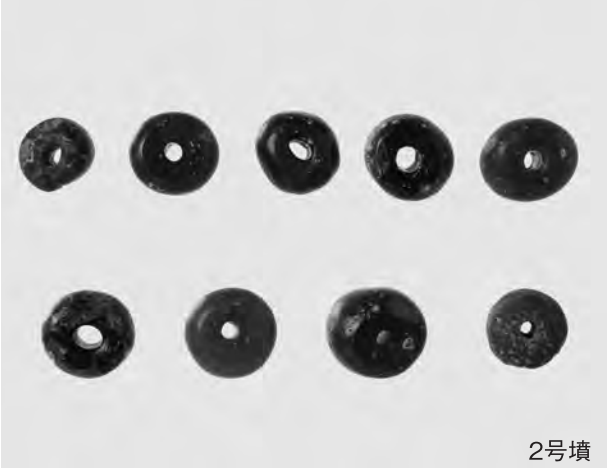
第61図30


1号墳

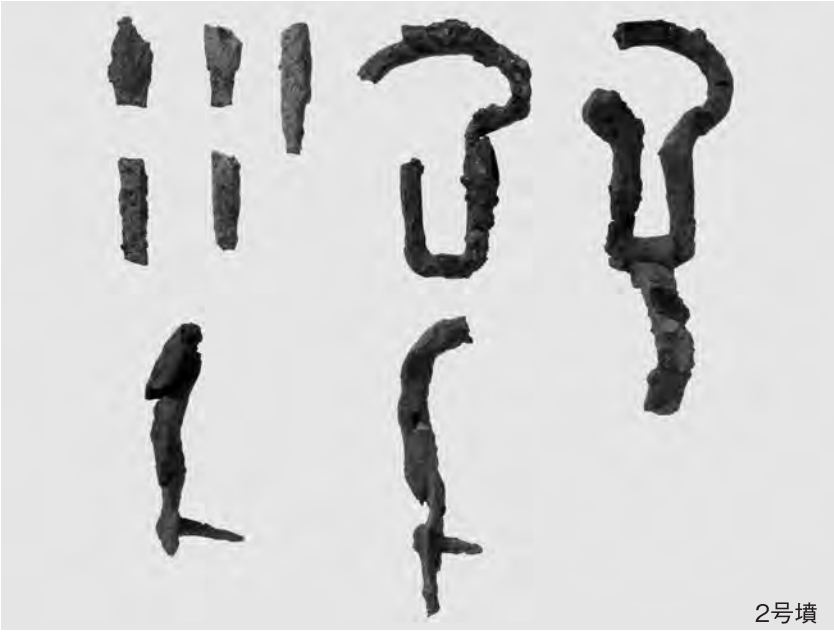
皿山古墳群Ⅰ–4号墳出土土器・1号墳出土特殊遺物

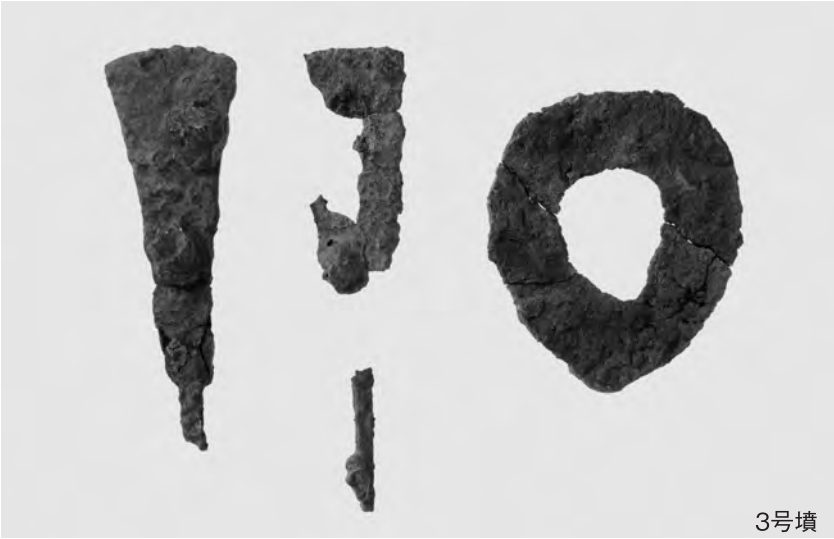






皿山古墳群Ⅰ−1・2号墳出土特殊遺物





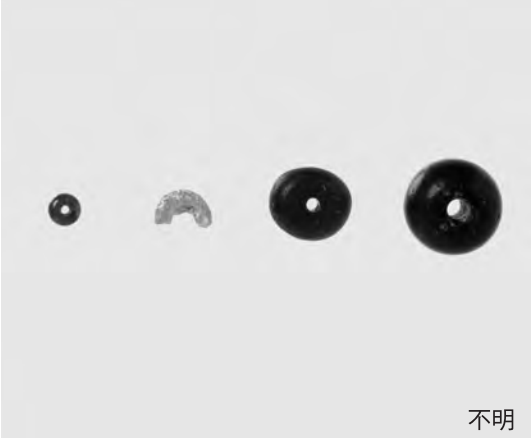
皿山古墳群Ⅰ-2～4号墳出土特殊遺物

4号墳

4号墳

5号墳

5号墳

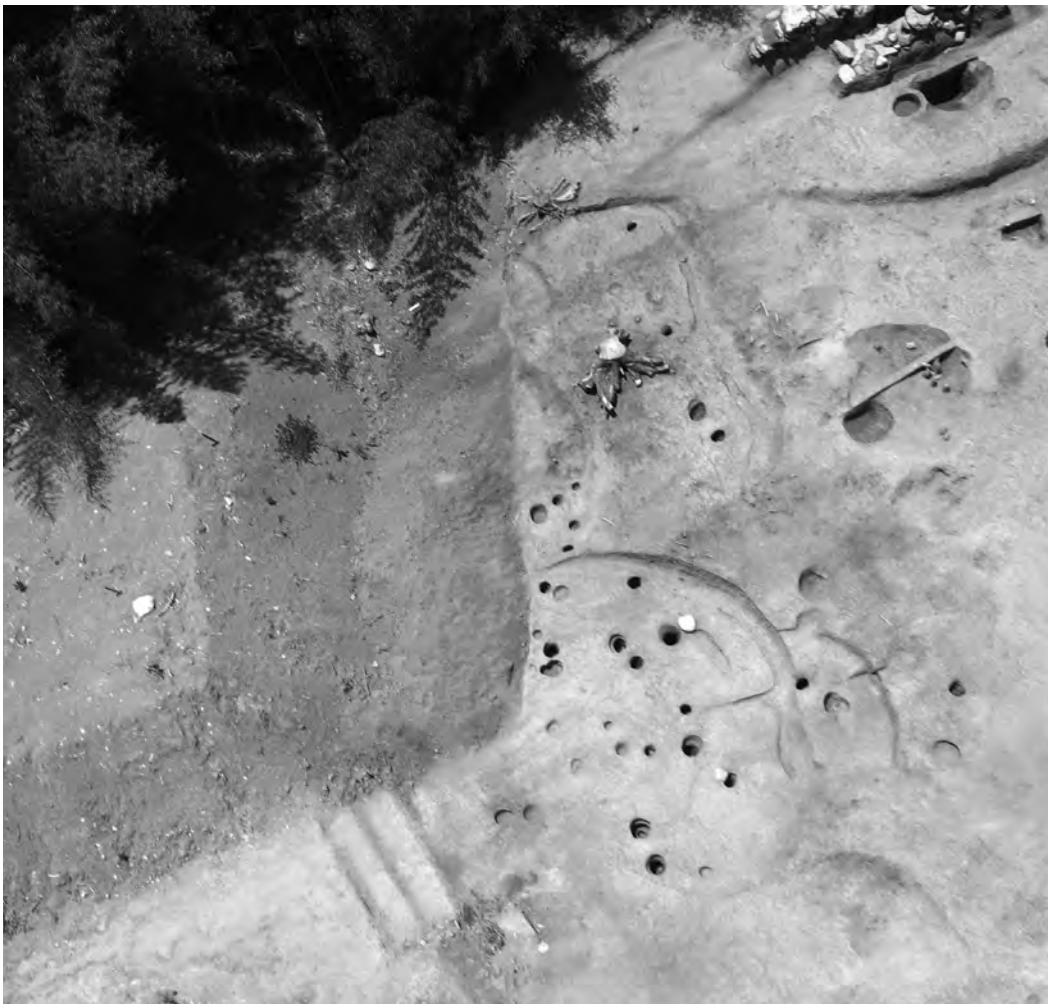

不明

皿山古墳群Ⅰ–4・5号墳、その他古墳出土特殊遺物

1　皿山古墳群Ⅰ区下層遺構
俯瞰（北東から）

2　弥生時代の遺構俯瞰
（東から）

1　弥生時代の遺構俯瞰
（北西上空から）



2　7～9号竪穴住居跡
俯瞰（南東上空から）

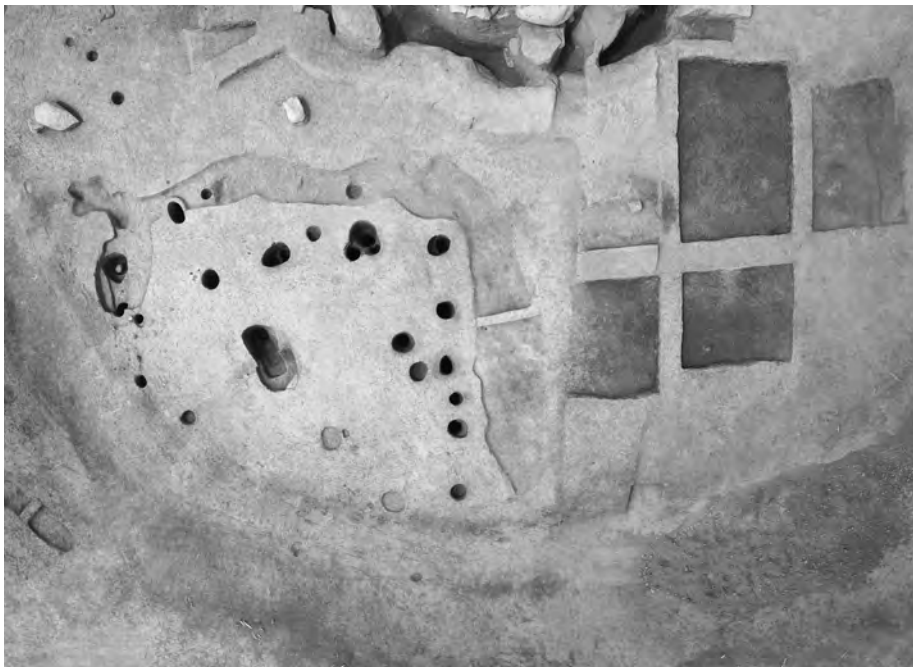
1　6・8号竪穴住居跡（東から）

2　1・3号竪穴住居跡（上空から）

3　3号竪穴住居跡屋内土坑
（西から）

1　6号竪穴住居跡（北東から）

2　7～9号竪穴住居跡（東から）



3　1号掘立柱建物跡（上空から）

1　2号土坑土層（西から）

2　3号土坑土層（北東から）

3　5号土坑土層（南から）

1　6号土坑土層（北から）

2　6号土坑土器出土状況
（北から）

3　溝1土層（南から）

1　甕棺墓（南から）

2　土壙墓（東から）

3　土壙墓完掘状況（東から）

第79図 住7-5

第98図 P4-1

第86図 建1-7

第96図上

第89図 土2-2

第96図下

第89図 土6-1

第102図1～17

第98図 P3-1

第102図18

皿山古墳群Ⅰ区下層出土遺物1

第102図19　第102図20

第102図22

第102図23

第102図25

第103図27

第103図28

第103図29

第103図30

第103図31

第103図32

第103図34

第103図36

第103図37

皿山古墳群Ⅰ区下層出土遺物2

第103図39

第103図40

第104図42

第104図43

第104図47

第104図48

第104図49

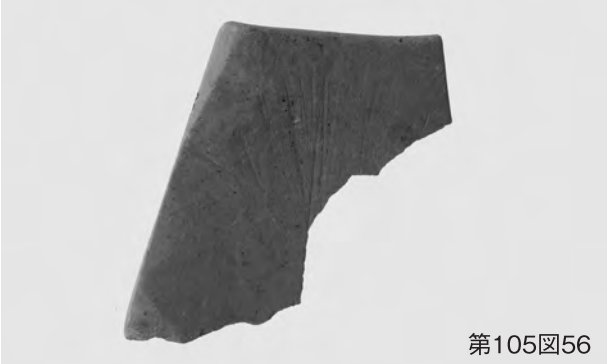
第104図50

第104図52

第105図53

皿山古墳群Ⅰ区下層出土遺物3

第105図54


第105図56

第105図57

第105図58

第105図59

第105図60

第105図62

第105図63

第105図64

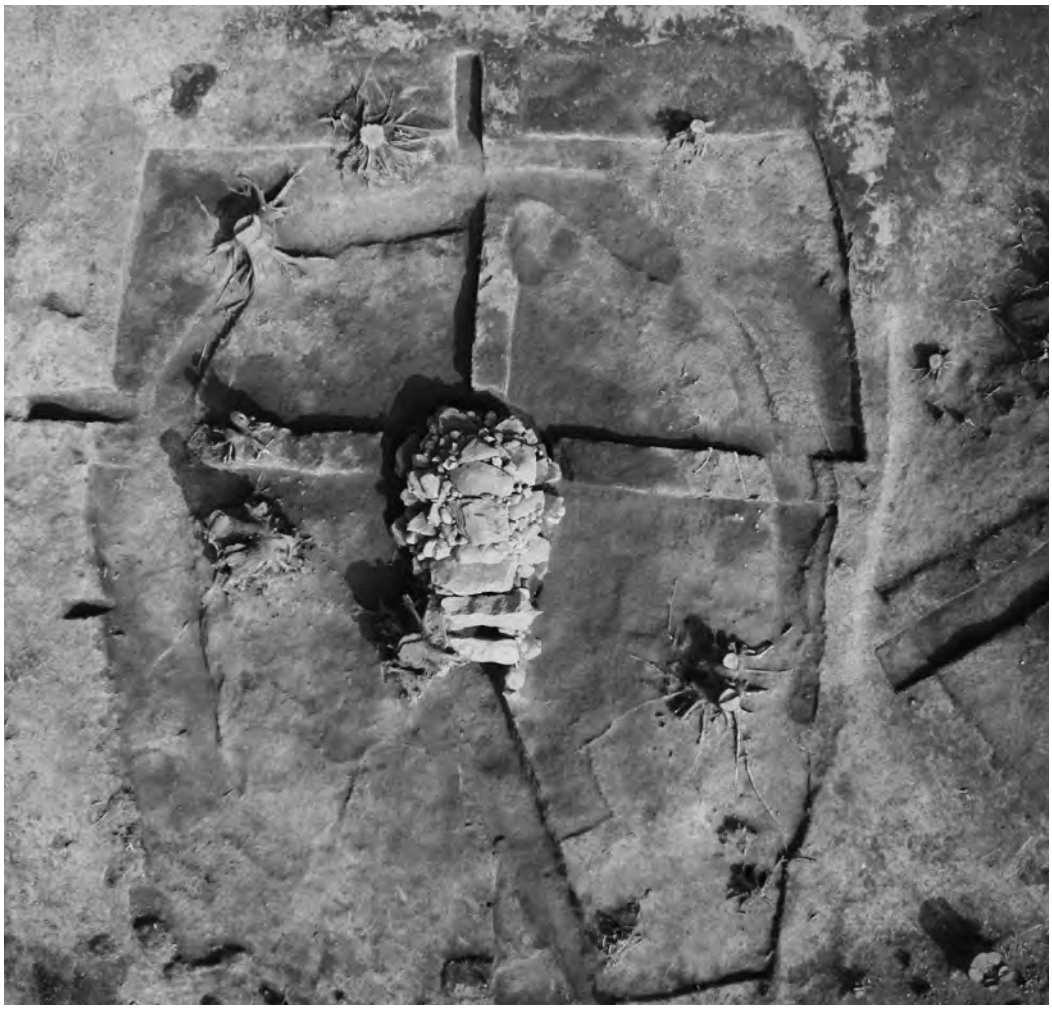
第105図65

皿山古墳群Ⅰ区下層出土遺物4

1　Ⅱ区全景（南東から）

2　1号竪穴住居跡（南から）

3　同カマド跡（南から）



1　Ⅲ-1号墳全景
（北西上空から）

2　Ⅲ−2号墳全景
（上空から）

1　Ⅲ−1号墳現況（南から）

2　Ⅲ−1号墳現況（南西から）

3　Ⅲ−1号墳表土除去（南西から）

1　Ⅲ−1号墳墳丘横断土層西側
（南から）

2　Ⅲ−1号墳墳丘横断土層東側
（南から）

3　Ⅲ−1号墳墳丘縦断土層
（西から）

1　Ⅲ−1号墳閉塞（南から）

2　Ⅲ−1号墳墓道土層（南から）

3　Ⅲ−1号墳墓道土層（南西から）

1　Ⅲ−1号墳墓道土器1群出土状況
（南から）

2　Ⅲ−1号墳墓道土器2群出土状況
（南から）

3　Ⅲ−1号墳石室奥壁
（玄門側から）

1　Ⅲ−1号墳石室右側壁
（玄門側から）

2　Ⅲ−1号墳石室左側壁
（玄門側から）

3　Ⅲ−1号墳石室玄門
（奥壁側から）

1　Ⅲ−2号墳現況（西から）

2　Ⅲ−2号墳墳丘横断土層西側①
（南から）

3　Ⅲ−2号墳墳丘横断土層西側②
（南から）

1　Ⅲ−2号墳墳丘横断土層西側③
（南から）

2　Ⅲ−2号墳墳丘横断土層東側
（南から）

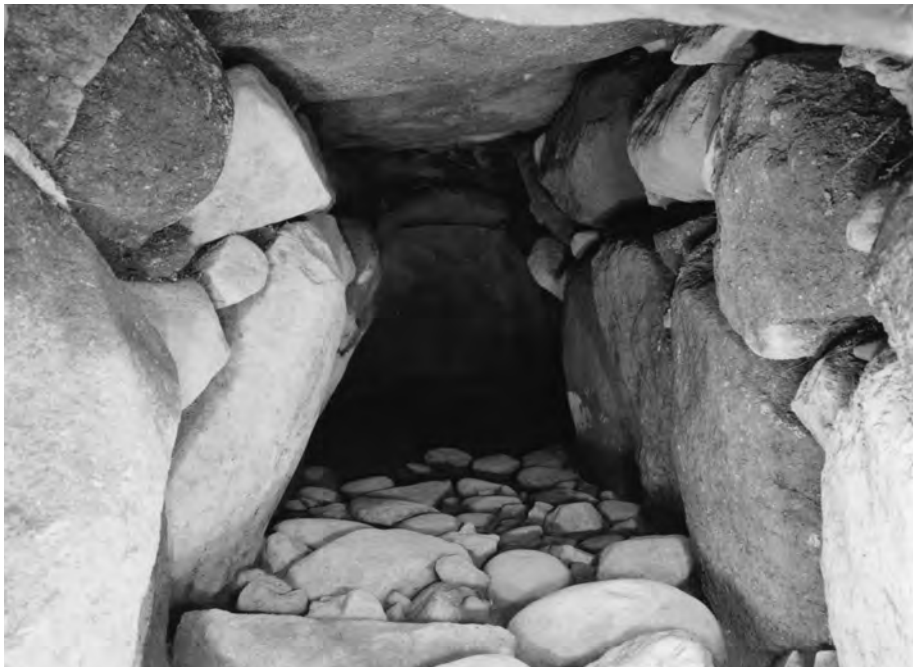
3　Ⅲ−2号墳墳丘縦断土層
（西から）

1　Ⅲ−2号墳周溝土器出土状況
（南西から）

2　Ⅲ−2号墳閉塞
（南から）

3　Ⅲ−2号墳墓道土層
（南から）

1　Ⅲ−2号墳墓道土器出土状況（南から）



2　Ⅲ−2号墳羨道（南から）

3　Ⅲ−2号墳羨道（奥壁側から）

1　Ⅲ−2号墳石室奥壁
（玄門側から）

2　Ⅲ−2号墳石室右側壁
（玄門側から）

3　Ⅲ−2号墳石室左側壁
（玄門側から）

1　Ⅲ−2号墳石室玄門
（奥壁側から）

2　Ⅲ−2号墳石室完掘
（玄門側から）

3　Ⅲ−2号墳石室排水溝
（南から）

第116図5

第116図6

第116図8

第116図9

第116図10

第116図11

第117図1

第117図2

第117図3

第117図4

第117図5

第117図6

第117図7

第117図8

第117図9

第117図10

第117図12

第117図13

第124図12

第124図17

皿山古墳群Ⅲ区出土遺物2

第125図7

第126図6

第126図9

第127図1

第127図16

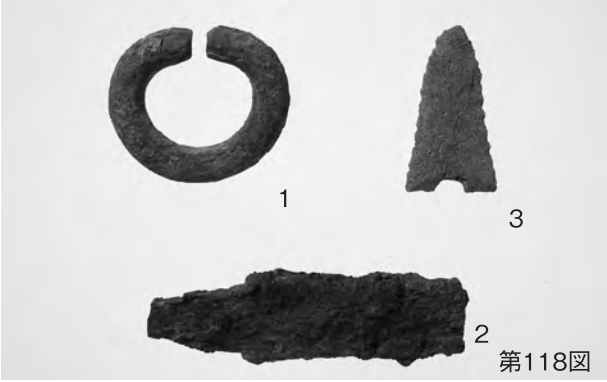
第127図19

第127図20

第127図23

皿山古墳群Ⅲ区出土遺物３

第127図24



第118図

第128図

第128図

第128図

第128図33

第128図43

第128図

報告書抄録

ふりがな	がさめきこふんぐん　さらやまこふんぐん
書名	ガサメキ古墳群　皿山古墳群
副書名	
巻次	
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	23
編著者名	飛野博文(編)・吉村靖徳・齋部麻矢・小嶋篤・松崎友理・(株)古環境研究所・末次大輔・秦憲二・城門義廣
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838－0106　福岡県小郡市三沢5208－3　☎0942－75－9575
発行年月日	西暦2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
がさめきこふんぐん2く ガサメキ古墳群2区	ふくおかけんちくじょうぐんこうげまち 福岡県築上郡上毛町 おおあざかみとうばる 大字下唐原2257-10ほか	40646	960093	33度 33分 46秒	131度 9分 54秒	20100705 ～ 20110131	2,400㎡	東九州 自動車道 建設
がさめきこふんぐん3く ガサメキ古墳群3区	ふくおかけんちくじょうぐんこうげまち 福岡県築上郡上毛町 おおあざかみとうばる 大字下唐原2259-14ほか			33度 33分 46秒	131度 9分 49秒	20120904 ～ 20121026		
さらやまこふんぐん1く 皿山古墳群Ⅰ区	ふくおかけんちくじょうぐんこうげまち 福岡県築上郡上毛町 おおあざかみとうばる 大字上唐原2349–2ほか		960050	33度 33分 28秒	131度 10分 34秒	20111214 ～ 20130823	12,000㎡	
さらやまこふんぐん2く 皿山古墳群Ⅱ区	ふくおかけんちくじょうぐんこうげまち 福岡県築上郡上毛町 おおあざかみとうばる 大字上唐原2400-6ほか			33度 33分 25秒	131度 10分 38秒	20120104 ～ 20120128		
さらやまこふんぐん3く 皿山古墳群Ⅲ区	ふくおかけんちくじょうぐんこうげまち 福岡県築上郡上毛町 おおあざかみとうばる 大字上唐原2425ほか			33度 33分 22秒	131度 10分 42秒	20110105 ～ 20120321 20120416 ～ 20120809		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ガサメキ古墳群2区	古墳	古墳	円墳2基(単室横穴式石室)	大刀・馬具・土器等	
ガサメキ古墳群3区	古墳	古墳	円墳2基(単室横穴式石室)	弥生～中世土器片	
皿山古墳群Ⅰ区	散布地 集落 古墳	旧石器 弥生 古墳	包含層、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑等、円墳5基	三稜尖頭器 土器・石器・ドングリ 装身具、鉄製品、土器	
皿山古墳群Ⅱ区	集落	古墳時代	竪穴住居跡1	土器	
皿山古墳群Ⅲ区	古墳	古墳時代	円墳2基(単室横穴式石室)	装身具、鉄製品、土器	

遺跡の概要

ガサメキ古墳群では上毛町教委による調査を含めてこれまでに10基の古墳が調査された。皿山古墳群に比して小規模な古墳からなる群集墳である。ここの古墳もいずれも盗掘を受けていたが、2–1号墳では大刀・金銅装の辻金具などが出土し、直径10mほどの小規模な古墳の被葬者像を窺う材料を得ることができた。

皿山古墳群では7基の円墳を調査したが、西端（1区）の5基と東端（3区）の2基との間は300m近い距離を隔てていて、別個の群を構成していたものであろうⅠ区の古墳のうち、1号墳は直径20m強の墳丘に周溝を巡らせた比較的大型の古墳で、墳丘の土層観察で特異な盛土法が観察された。古墳はいずれも盗掘を受けていて、出土品も乏しい。なお、古墳の下層から弥生時代の遺構・遺物の他、三稜尖頭器などが発見されて、この段丘上で旧石器時代の生活の跡が追認された。また、両古墳群の間でカマドをもつ竪穴住居跡が1軒確認されていて興味を引く。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 26	登録番号 18

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
—23—

ガサメキ古墳群
皿山古墳群

平成27年3月31日

発行　九州歴史資料館
〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208–3

印刷　株式会社インテックス福岡
〒812-0892 福岡県福岡市博多区東那珂1–15–1